２０１５年度　修士論文

柔道普及に果した雑誌メディアの役割

柔道関係雑誌群の内容分析(1898-1922)

早稲田大学　大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツ文化研究領域

５０１２Ａ０６２−５

横井　久美子

研究指導教員　：　志々田　文明　教授

総頁数　67 頁

目次

はじめに 4
1. 問題の所在 4
2. 研究の方法 10
内容分析における分析単位およびカテゴリの検討 11
第１章　ページ数遷移に見る初期雑誌群の役割の変化 14
1. 柔道はどのように定義されていたか 14
2. 『国士』『柔道』『有効乃活動』のページ数および価格の変化 16
3. 『国士』の誌面傾向 23
4. 『柔道』『有効乃活動』の誌面傾向 27
第２章　雑誌『柔道』の内容分析 34
1. 『柔道』『有効乃活動』の執筆者の傾向 34
2. 『柔道』の内容分析 40
第３章　雑誌『柔道』に見る編集者の重要性 44
1. 雑誌『柔道』の誌面変化のきっかけとなった編集者、水谷竹紫 44
2. 嘉納と水谷の関係性 48
第４章　結論 51
第５章　文献・資料 54
1. 文献 54
2. 参考資料 57
① 『講道館百三十年沿革史』掲載の「編集兼発行者・発行所・頁・定価の変遷」57
② 『作興』に掲載された「雑誌の発行」および「『柔道会』創立の趣旨」再録57
③ 『国士』号別ページ数一覧 60
④ 『柔道』月間記事点数サブカテゴリ別の表 63
⑤ 『柔道』月間記事ページ数サブカテゴリ別の表 64
⑥ 水谷竹紫年表 65

図表目次

表 1　メインカテゴリ 12
表 2　サブカテゴリ 13
表 3 初期雑誌群の編集兼発行者・発行所・平均頁数・定価の変遷..... 23
表 4 初期雑誌群の編集兼発行者・発行所・平均頁数・平均定価の変遷（誌名別）. 23
表 5　『国士』号別ページ数一覧..... 62
表 6　月間記事点数サブカテゴリ別(1)..... 63
表 7 月間記事点数サブカテゴリ別(2)..... 63
表 8　月間記事ページ数サブカテゴリ別(1)..... 64
表 9　月間記事ページ数サブカテゴリ別(2)..... 64
表 10　水谷竹紫年表（『水谷八重子 女優一代』p.288 に引用追記）..... 67

図 1　『国士』ページ数の遷移 16
図 2　『柔道』ページ数の遷移 17
図 3　『有効乃活動』ページ数の遷移..... 18
図 4　『柔道』『有効乃活動』のページ数遷移 18
図 5　『柔道』『有効乃活動』署名記事の本数（号別）..... 34
図 6　『柔道』署名記事の本数（号別）..... 35
図 7　月間総記事点数比較（メインカテゴリ）..... 40
図 8　月間総記事点数比較（サブカテゴリ）..... 41
図 9　月間総記事ページ数比較（メインカテゴリ）..... 42
図 10　月間総記事ページ数比較（サブカテゴリ）..... 42

はじめに

1.　問題の所在

柔道は世界に知られる武道種目である。その母体となる柔術は、武士の時代には外物、つまり主流ではないものとされていたが、廃刀令によって剣術が制限された明治期、嘉納治五郎(1860-1938)によって講道館柔道が創始されると、学校体育への採用や試合での活躍を背景に国内で普及・発展し、海外にも拡がっていった。

柔道の創始者としてその名を知られる嘉納治五郎は、この普及・発展にかかわって多くの講述をなし、文章を遺している。井上(1992；2004)によって指摘されるように、嘉納は講道館柔道全体を説明可能なものとして構成し、あらゆる機会をとらえて柔道を解説し、正当化し、勧奨する言論活動に従事した。

嘉納の登場以前には、技術は専ら膨大な修行時間を費やすことによって伝授され、免許皆伝となった時に初めて伝書が授けられるものであり、またその概要の説明は心法[1]に還元して行われていたが、嘉納はこれを捨象し、物理学で説明可能な理論を打ち立て[2]、柔術において言語化されていなかった個々の技術についても平易な言葉での説明を行った。

また、嘉納は自前のメディアとして講道館雑誌を約 40 年間にわたって刊行し、柔道について倦まず弛まず語り続け、活発な言論活動などを通して、柔道を広く世間に認知させていった(井上，2004：pp46-48)。井上は嘉納を「言説の人」と表現するが、まさしく嘉納は、指導者であると同時に柔道の強力な「語り手」であった。

講述において嘉納の扱うテーマは多岐にわたった。その内容は、(1)わざや技術、また試合をも含める修行の仕方についての理想を説くもの、(2)日常生活を通じての修養や訓育に関するもの、(3)国家や社会の問題を指摘し、見解と訓育を述べるものに大別される。多くは口述筆記により、嘉納塾[3]等の塾生および柔道修行者、一般青年らに向けて、指導者とし

---

[1] 心を修める法。心の修養。江戸前期の臨済宗の高僧、沢庵が将軍家剣術師範の柳生但馬守宗矩に与えた『不動智神妙録』において言及された禅の心法、不動智は「なにものにも執着しない心、一所に心を留めない心」を指し、「剣術にとどまらず、弓術、柔術、馬術、相撲、水練など広く武術全般に、その奥義として受け入れられた」（寒川, 2014：p.300）。

[2] 柔道の社会的な存在根拠については柔術に倣って儒学に、すなわち修身に求めた。この問題は寒川(2014)の『日本武道と東洋思想』に詳しい。

[3] 嘉納塾とは、嘉納と起居を共にして膝下に学ぶ場であり、「親類や懇意な人から指導・監

ての立場で執筆された。その言論活動の主な場となったのは、『青年養生訓』など若干の著作を除けば、嘉納自身が主宰する団体によって発行されてきた雑誌群である。

講道館雑誌群と呼称されるこれらは月刊誌であり、原則的に毎月 1 日を発行日とした。嚆矢となる『国士』が明治 31(1898)年 10 月に創刊、明治 36(1903)年 12 月に発行中止され、次の『柔道』が創刊される大正 4(1915)年 1 月までの間に 11 年間のブランクがあるものの、以降は『有効乃活動』、『大勢』、『柔道界』、『作興』、『柔道』と、幾度かの改題や分冊体制を挟みつつも、基本的には途切れることなく刊行され続けた。

- 『国士』明治 31(1898)年 10 月～明治 36(1903)年 12 月：造士会[4]
- 『柔道』大正 4(1915)年 1 月～大正 7(1918)年 12 月：柔道会
- 『有効乃活動[5]』大正 8(1919)年 1 月～大正 11(1922)年 3 月：柔道会

督をたのまれた幾人かの子供と、直接自分にたよって来た書生で、柔道教授の手伝をさせながら世話をした若干の人々」の集まりである(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：pp.66-67)。
嘉納は明治 15(1882)年、下谷北稲荷町永昌寺に居を移して柔道を教え（講道館の創立）、また知人の子弟を預かり教育を施した（嘉納塾の興り）。はじめは特段の規則もなかったが、明治 16(1883)年に上二番町へ転居した際に「舎中同盟規約書」を作り、明治 19(1886)年に麹町富士見町へ移転した後に「塾内規則書」を定めている。明治 31(1898)年、嘉納塾をして講道館を中心に組織した修養団体「造士会」の事業の一部とするとともに、善養塾、成蹊塾、全一塾を開き、塾生教育を拡張した。嘉納塾は大正 8(1919)年 11 月まで続いたが、成蹊塾は明治 36(1903)年に閉鎖され、善養塾・全一塾については嘉納塾閉鎖以前に姿を消している(嘉納先生伝記編纂会, 1964：pp.115-140)。
なお前掲書においては、善養塾は 10-20 才の、成蹊塾は丁年（横井注：21 歳）以上の塾生を、また全一塾は少壮学生を、それぞれ対象としていたとされており、真田(2014)も同様の記述をしているが(真田, 2014：pp.98-99)、『国士』第 4 巻 28 号（明治 34(1901)年 1 月発行）の「造士会塾舎教育要領」における対象者の年齢とは必ずしも合致しない。各塾の教育要領によると、それぞれの対象年齢は以下の通りである。(1)嘉納塾幼稚舎…満 6 歳～14 歳以下、(2)同中年舎…満 14 歳～20 歳以下、(3)同成年舎…満 20 歳以上。(4)善養塾…丁年以上、(5)成蹊塾…中学校程度・満 13 歳以上、(6)全一塾…満 9 歳以上の学生。嘉納塾、善養塾については嘉納自身が塾長を勤め、入塾希望の場合はまず造士会に入会しなければならない旨が明記されているが、成蹊塾、全一塾については明記されていない（『国士』復刻版第 4 巻：pp.311-320)。
この教育要領はのちに改訂され、明治 36(1903)年 1 月発行の『国士』第 6 巻 52 号においては成蹊塾と全一塾の対象年齢が変化した。改訂後の対象年齢は、それぞれ(5')成蹊塾…満 12 歳～20 歳以下、(6')全一塾…少壮学生（横井注：20 歳～30 歳頃）となっている。この改訂に伴い、成蹊塾・全一塾についても入塾の条件として造士会会員であることが明記された（『国士』復刻版第 6 巻：p.300 以降(ページ番号なし)）。
[4] 注 3 を参照のこと。
[5] 雑誌名は目次や文中で『有効の活動』と表記されていることが殆どだが、本の友社より出版された復刻版の題名が『有効乃活動』であることから、本研究でも後者の表記を用いることとした。なお引用文中に出てきた場合には引用元での記載を踏襲した。

- 『大勢』大正 11(1922)年 4 月～同 8 月：講道館文化会
- 『柔道界[6]』大正 11(1922)年 4 月～同 9 月：講道館文化会
- 『柔道[7]』大正 11(1922)年 10 月～大正 12(1923)年 12 月：講道館文化会
- 『作興[8]』大正 13(1924)年 1 月～昭和 13(1938)年 1 月：講道館文化会
- 『柔道』昭和 5(1930)年 4 月～昭和 13(1938)年 6 月：講道館文化会[9]
- 『柔道』昭和 13(1938)年 7 月～現在に至る：講道館[10]

『国士』第 1 巻第 1 号（明治 31(1898)年 10 月発行）にはその発行元となる造士会の創立趣旨と造士会会則が掲げられ、その目的（「少壮ノ者ヲ指導シテ立身ノ方針ヲ定メ心身ヲ鍛錬セシムル」）と三つの事業が記されている。第一は「塾舎を設けて少壮の学生を監督薫陶」すること、第二は「広く道場を開きて其心身を鍛錬せしめ」ること、第三は「雑誌を発行して適当なる指導と有益なる知識とを授け」ることであった（嘉納, 1898：pp.3-4）。

刊行元となる団体は幾度かの変遷を経ている。大正 4 年の『柔道』刊行時には「柔道会」を新たに創立し、『大勢』刊行時にその名称を「講道館文化会」と改めたが、いずれもその創立趣旨および会則において「柔道ノ発達及普及ヲ図ル」ことを目的として掲げ、具体的な事業として「雑誌及図書ヲ発行スルコト」を第一に挙げている[11]（嘉納, 1914：p.3；1922：pp.54-55）。

当初、道場における嘉納自身の実践から始まった講道館柔道は、規模が拡大するにつれ、実践者としての立場から純粋な指導者としての立場へと嘉納の位置付けを必然的に押し上げるとともに、「講道館柔道の『宣伝者』としての嘉納治五郎」（鈴木, 1997：pp.30-32）という側面を強めていった。明治 42(1909)年に財団法人化した講道館が柔道の研究および道

---

6 原典の手に入らぬものは『講道館百三十年沿革史』および大滝編(1972：pp.304-308)、東(2012)によった。
7 同上。
8 同上。
9 『講道館百三十年沿革史』には「昭和 20(1945)年 1 月まで講道館文化会と書かれているが、大滝(1972)によると昭和 13(1938)年 7 月以降が講道館発行となっているため（大滝, 1972：p.307）、ここでは大滝に倣った。
10 昭和 20(1945)年 3 月～昭和 21(1946)年 5 月まで休刊（『講道館百三十年沿革史』p.170）。
11 「柔道会規則」に於いては、これに続けて「講演会及講習会ヲ開催スルコト」「各地ニ視察員又ハ講師ヲ派遣シ柔道ノ状況ヲ視察シ且其ノ奨励指導ヲ為スコト」が挙げられ、「講道館文化会規則」の時点ではこれらに加えて「其他必要ト認ムヘキ諸般ノ施設ヲ為スコト」が挙げられている。

場経営、各種制度の整備を行う一方、これらの団体は、「柔道の文化的精神を発揚し、宣伝する」役割を担っていた(嘉納, 1922 : p.53)。その実務の第一として挙げられた雑誌図書刊行事業は、柔道の普及・発展にとって重要な位置付けであったと言えよう。

これらの雑誌群は一部が復刻版として出版されており、今でも直接読むことが出来る。

だが、その雑誌の記事内容や誌面構成については、殆ど紹介されていない。

例えば平成 24(2012)年に講道館より出版された『講道館百三十年沿革史』には、かつて刊行された雑誌群のページ数、価格、当時の編集者兼発行者が記載されているが(p.170)、これは解題時の第一号に依拠するものであって、解題を伴わない価格の改定や編集者の変更、またページ数の増減については言及されておらず、個々の巻号との乖離が顕著であり、特に刊行期間の長い雑誌については、必ずしも代表的なデータとは見なせないという問題がある。また、同著には各誌の発刊趣旨の要旨が掲載されており(pp.150-170)、それぞれの雑誌の性格については論じられていないため、一見すると発刊趣旨に沿った雑誌が刊行され続けたかのような印象を与えるが、実際の雑誌を繙くと、同一誌名の雑誌であっても記事内容の構成やページ数のバランスが発刊時期によって異なり、当初提示されたカテゴリからは大きく逸脱した構成の雑誌へと変貌していることが確認される。従って、発刊趣旨のみの紹介ではこれらの雑誌の説明としては不十分であり、内容についての補足を伴うことで、より正しい記述となることが期待される。

また、嘉納自身は雑誌発行を重要視しており、その意図を『作興』において明文化しているが(嘉納, 1927(大滝編, 1972) : pp.139-140)、柔道史および柔道研究において、雑誌刊行事業は殆ど着目されていない。

昭和 14(1939)年に講道館より出版された丸山三造編著『大日本柔道史』には、大正 4(1915)年の『柔道』創刊号および大正 11(1922)年の『大勢』創刊号の表紙が掲載されているものの、文中では「柔道会」から「講道館文化会」への名称変更および講道館有段者会の組織に関する記述が主であり[12]、雑誌群については名称と内容の変更があったことに

[12] 同著は 1170 ページにも及ぶ大著であるが、ここで記述に割かれたスペースは僅かに数行で、該当の箇所は以下の通りである。「柔道の発展普及に随ひ、柔道の使命を痛感したる嘉納師範は従来の「柔道会」を「文化会」と改め、今迄『有効の活動』に掲載した柔道の技術に関する論文はこれを単行本として出版する事とし、思想問題、体育問題、精神修養その他凡そ生活の改善に関する諸問題は、新に創刊する雑誌『大勢』に掲載することにな

触れる程度にとどまっている(丸山, 1939：pp.194-195)。

雑誌群を対象とした学術研究としては、東による「嘉納治五郎の啓蒙雑誌の変遷」(東, 2012)および「嘉納治五郎の啓蒙雑誌「国士」」(東, 2011)を挙げることが出来るが、前者は各雑誌の発刊時期および発刊趣旨を題材として時代的背景と各誌の発刊意図を論じるに止まり、後者は主として造士会の設立趣旨、会則、各塾の情報等によって同会の概要を示し、また嘉納による『国士』の巻頭言の題名を列挙したものである。いずれも雑誌という形態について、すなわち具体的な記事の内容や筆者、誌面構成について論じたものではなく、嘉納自身によってなされた説明の文章のみに依拠しており、先に指摘した『講道館百三十年沿革史』における記述と同様の問題を孕んでいる。

講道館雑誌群を対象としているにも関わらず、内容の説明を発刊趣旨もしくは巻頭言のみに求めてしまう、というこの東の研究態度は、既存の嘉納研究について鈴木(1997)が指摘する「嘉納の言説の逐語的な整理、紹介に終わってしま」(鈴木,1997：pp.17-19)う、という問題点とも符合するものである。刊行の意図に限らず、これらの雑誌群がどういう性格を持っていたかを知るためには、嘉納の言説以外の要素にも目を向ける必要があると言えよう。

雑誌刊行事業そのものの意図は嘉納によって明文化されている。「道場における講義・訓話ばかりでは、一局部に偏して、ひろく教育を普及させることはむずかしい。これは、多年の経験から見ても、どうしても、雑誌をだす必要がある」(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：pp.139-140)。また、「講道館柔道の修行者を主として、さらに他方面にも修養の資料となるべき雑誌を発行したならば、これによりて継続的に、秩序的に、柔道に関する自分の考えを示すことができる。さらにこの仕事に加えて、適当なる機会を利用して、講道館において話をしたならば、やや教育が行きわたるであろう」(嘉納,1927(大滝編, 1972)：p.140)。これが嘉納の考えであった。

こうして刊行された雑誌群であったが、実際に刊行された雑誌の誌面においては、先に

り、柔道界の消息を中心とした柔道記事はこれも新に創刊する雑誌『柔道界』に掲載することにした。(・・・)かくて十一年四月よりこの二雑誌が創刊さるゝに至つた。(・・・)大正十一年九月にはさきに創刊された二雑誌を合本したやうな新雑誌『柔道』が発刊さるゝことになつた。」(丸山, 1939：p.194)
ここでの記述は『有効乃活動』八巻第一号の主張欄に記載された「大正十一年を迎へて会員諸氏に告ぐ」(嘉納, 1922：p.10)に依拠している。

述べたように、当初の刊行趣旨から想定される誌面構成と実態とが必ずしも合致していないことが散見され、また収支の面では業績不振であった。業績不振、つまり発行部数が伸び悩んでいたことは、嘉納の明示した教育的効果が必ずしも望めないことを意味する。それにも関わらず、雑誌刊行事業が継続されてきたということは、ここに明文化されていない価値が見出されていたと考えることが出来る。

嘉納の思想を世に問い、啓蒙するという意図であれば、雑誌ではなく著作として出版することも可能であり、『青年修養訓』、『柔道教本』のような単著も存在しているが、実際に発行されたのは雑誌であった。初期の雑誌群に掲載された嘉納の論考の数は、『国士』66本[13]、『柔道』48本[14]、『有効乃活動』34本[15]と膨大である。

明治大正期に雑誌文化が隆盛を極めたという時代的な背景を差し引いても、これらの雑誌群には、柔道普及にとって欠かせない役割があったのではないだろうか。

以上の問題意識から、本研究においては、柔道普及に果たした雑誌メディア[16]の役割について、明治・大正期の柔道関係雑誌群の内容分析を通じて歴史的に考察する。考察の対象は初期の雑誌群『国士』『柔道』『有効乃活動』とし、誌面の変遷と、それによって起こった執筆者および記事内容・語り口の変化を確認する。選定理由は以下の通りである。

(1) 刊行期間が長く、通時的な誌面の変化を見るのに適していること
(2) 国内経済が安定していた時期を含んでおり、のちの経済的な理由による規模の縮小や価格改定を見るのに適していること
(3) 復刻版が発行されており、検証しやすいこと

---

[13] 『国士』復刻版の目次に掲載されたものを数えると63本だが、大滝(1972)によって挙げられた記事の総数は66本であった(大滝, 1972：pp.301-302)。
[14] 『柔道』復刻版より署名記事を数えると79本だが、これには「柔道本義」等の技術的な論考をも含んでいるため、大滝(1972)によって挙げられた記事を確認し、48本と確認した（大滝, 1972：pp.302-303)。
[15] 『有効乃活動』復刻版の目次を確認すると署名記事は39本。大滝(1972)によって挙げられた記事33本に同著で欠本となっていた号の記事をこれに加え、34本とした(大滝, 1972：pp.303-304)。
[16] 通常「メディア」と呼んだ場合、新聞やTV、ラジオといったマス・メディアがイメージされるが、ここでは講道館やその前身となった団体による機関誌としての雑誌群に注目した。

第一の課題として、初期の雑誌群『国士』『柔道』『有効乃活動』のページ数および価格の推移を明らかにし、主として発刊の趣旨をもとに、雑誌群に期待されていた役割について整理・考察する。

また、『国士』は目次や書誌情報の記載の仕方が後年と異なるため、構成や内容を通時的に把握することが困難だが、『柔道』はそれらの整備がされたことに加えて記事内容・誌面構成・ページ数の面で特に変化が大きく、雑誌群の変遷を見る上で重要である。従って、社会学における質的研究の手法「内容分析[17]」によって『柔道』の誌面の変化を詳らかにし、また、執筆者および記事の語り口の変化について考察することを第二の課題とする。

第三の課題として、雑誌『柔道』の誌面の変化を齎した編集者・水谷武(1882-1935, 筆名：水谷竹紫)に着目し、水谷自身の経歴および交友関係と『柔道』の執筆者の変化を関連付けて考察する。

これらの課題を通じて、雑誌刊行事業が柔道の普及に貢献したメディア的特質について検討する。それは、その内容やあり方について試行錯誤を繰り返しながら雑誌を刊行し続けることによって、語る人を増やし、また語り方を多様にし、語られる内容をも押し広げることが可能になるからである。このような「語り手」、すなわち発信者の多様性は、受信者にも影響を与え、受信者が発信者へと変わり得る可能性を担保する。つまり、受信者、すなわち「読み手」が柔道の「語り手」に変容するのである。かくして本研究は、雑誌刊行事業が柔道の「語り手」の養成に果たした役割を明らかにすることにもなるのである。

2. 研究の方法

本研究は、文献を対象として、歴史学的な観点から史料批判を行い、その上で歴史的考察を行うものである。

歴史学とは、起こった事柄すなわち過去の事実を対象として、史料によってそれを明ら

---

17 ベレルソン自身の定義を引けば、内容分析とは「表明されたコミュニケーション内容の客観的・体系的・数量的記述のための調査技術」である(ベレルソン, 1957)。分析単位としては、「単語」「命題」「人物」「種目（素材のおおまかな分類）」「スペース・同数測定」が、カテゴリとしては「何を言うか」（主題、方向・志向、基準、価値、方法、特徴、演者、権威、起源、標的）、「どんなに言うか」（発言の形式、強度、工夫）が挙げられ、これらの分析によって内容をある程度正確に記録することが可能となる(ベレルソン, 1957)。

かにすることと、叙述することによって成り立っている（林, 1970）。史料に基づいて事実の認識を行うため、歴史学には特に史料学及び史料批判と称せられる基礎部門が付随している[18]。前者は史料の分類法及びその蒐集事業のことを指し、これを予備的作業として後者の批判を行う（林, 1970：pp.20-24）。

本研究は『講道館百三十年沿革史』に対する (1)真純性の批判 に該当し、初期の講道館雑誌群を対象に、その内容・構成・ページ数の面から分析を行う。本稿においては記事の形式と内容によってカテゴリを作成・分類し、表にまとめて全体の傾向を考察した。

内容分析における分析単位およびカテゴリの検討

永木(1999)による内容分析の際には、分析単位をパラグラフとし、内容の解釈については先行研究をもとに柔道の価値を示すカテゴリを設定し、永木を含む柔道経験者 3 人の協議によってどのカテゴリに属するかを判断した上で分類を行った。

本研究においては、対象となるテクストが膨大であり、また様々な立場の人物によって書かれていることから、分析単位はパラグラフではなく記事とした。

カテゴリについては、まず、嘉納の示した 9 つのコーナーによって構成される初期の雑誌『柔道』を参考に、それをカテゴリとして全期間の記事分類を行ったところ、刊行時期が下るに従って「雑録」のみが増大し、分析と呼べない結果となったため、通時的に分析を行うための分類を検討し、メインカテゴリとして 7 つを定義し、そのうち 5 つのカテゴリについてはサブカテゴリを用意した。

雑誌掲載時に「彙報」欄に記されている記事についてはその分類をそのまま用いたが、「時勢」「論説」「説林」等、付与される場合と付与されない場合に明確な基準が見られない分類についてはいったん保留し、内容によって改めて分類を行った。

---

18 「歴史学に特有の研究方法とは、史料を重んじ史料に基いて事実の認識を行なうということである。そしてそのため歴史学には特に史料学（Quellenkunde）及び史料批判（Quellenkritik）と称せられる基礎部門が付随しているのである。このことは、事実を認識するためには単に事実の意識を持つだけでは不十分であってそのための特別な技術を必要とすることを意味している。」（林, 1970：p.15）
「歴史学はもっぱら史料を取り扱うが、決して史料が歴史学の対象なのではない。歴史学の対象はあくまでも過去の事実であって、史料は単にそれを媒介するものに過ぎない。」（林, 1970：p.17）

今回設定した分類は次の通りである。

表 1　メインカテゴリ

メインカテゴリ	内容
啓発	啓発的要素のあるコンテンツ全般（一般、柔道のサブカテゴリ）
実践	実践方法に関するコンテンツ（柔道、他身体運動のサブカテゴリ）
試合・報道	紅白試合や大会等の結果表を主としたコンテンツのうち、コーナーとして独立しているもの
教養	啓発というより知識を与えるコンテンツ（科学・社会、文芸・歴史のサブカテゴリ）
彙報	会員名簿、〇〇だより、体験記、柔道に関する旅行記等と、予め彙報に分類されたもの
娯楽	写真および気楽に読めるコンテンツ（柔道・スポーツ、その他のサブカテゴリ）
雑録	他の分析項目に含まれないもの（柔道、雑録のサブカテゴリ）

表 2　サブカテゴリ

サブカテゴリ	内容
啓発：嘉納	嘉納の「主張」記事
啓発：一般	主として一般的なことがらに言及する啓発的コンテンツ
啓発：柔道	主として柔道に言及する啓発的コンテンツ
実践：柔道	形、教授法、稽古法、試合の進め方を含む
実践：他身体運動	水泳や競走に関するルールや実践方法を含む
報道：柔道	紅白試合や大会等の情報・結果を主とした独立コンテンツ
報道：他スポーツ	試合や大会の情報・結果を主とした独立コンテンツ
教養：科学、社会	知識を与えるコンテンツのうち自然科学、政治、社会、外交に関連するもの
教養：文芸、歴史	知識を与えるコンテンツのうち文芸、歴史に関連するもの。海外であっても人物伝はこちらに含む
彙報	会員名簿、〇〇だより、体験記、柔道に関する旅行記等と、予め彙報に分類されたもの
娯楽：写真	写真
娯楽： 柔道・スポーツ	気楽に読めるコンテンツのうち柔道・スポーツ等身体運動に関わるもの
娯楽：その他	気楽に読めるコンテンツのうち身体活動にほとんど関わらないもの、漫画を含む
雑録：柔道	他の分類に含まれないもののうち、柔道に関連するもの（講道館発展史、人物史を含む）
雑録：その他	他の分析項目に含まれないもの（会告、編集部より、を含む）

また、雑誌『柔道』は、その誌面において、文字サイズや 1 ページあたりの文字数が決まっておらず、上下二段組の記事で内容が全く別で、かつ複数ページにわたって掲載されている場合や、写真・図表などを含んで誌面構成がされている場合があり、言わば新聞紙のような構造となっているページが存在する。メディア全体として読者にどのような影響を与えたかを考察するため、これらを 0.5 ページ単位で数え直した。

第１章　ページ数遷移に見る初期雑誌群の役割の変化

1.　柔道はどのように定義されていたか

嘉納は自身の経験をもとに、主として４つの観点から、柔術修行の教育的効果を見出している(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：p.49)。

(1) 身体の健康増進によって精神状態が落ち着き、自制が利くようになったこと

(2) そのための鍛練には柔術が最も効率的また効果的であること

(3) 柔術の勝負の理屈が、幾多の社会の他のことがらに応用可能であること

(4) 勝負の練習に付随する知的練習が、何事にも応用し得る知力の練習となること

柔道は当初、今日我々がイメージするような競技柔道とは異なり、心身の強化が試合の場に止まらない、日常生活にも応用できる全人教育として意図されていた。

嘉納が彼の柔道観を最もまとまった形で発表したのは、明治 22(1889)年の「柔道一班并ニ其教育上ノ価値」講演においてであった。講演の中で嘉納は、既存の柔術について解説、説明した上で、柔道は「柔道体育法[19]」、「柔道勝負法[20]」、「柔道修心法[21]」の 3 つによって構成されると宣言している。

柔道体育法は「身体全体の調和の取れた育成」を目指し、「全身的な動きと適切な運動量」および「安全性」を確保するというものであった。柔道勝負法は「それまでおこなわれていた戦時と平時における殺傷捕縛術としての柔術」、すなわち実用性を持つ武術としての効果、側面を意味する。柔道修身法は「心に対する教育すなわち知育と徳育を自覚的に柔道練習の中で実現」すること、「政治、外交、経済などの諸活動に際し、置かれた状況を正しく理解し、また困難な状況で的確な何段を下しうる精神力の養成」を指した(寒川, 2014：pp.284-292)。

この講演のうち、柔道修身法について述べた箇所において嘉納は、柔道の修行には「観察、記憶、試験、想像、言語及ビ大量」が必要であると強調している(嘉納, 1889：p.93)。

---

[19] 嘉納治五郎(1889) 柔道一班并ニ其教育上ノ価値. 渡辺一郎編 史料明治武道史, pp.86-89

[20] 嘉納(1889) 前掲書, pp.89-92

[21] 嘉納(1889) 前掲書, pp.92-97

友添(2001)によると、これらの用語はそれぞれ「どうすればうまく技がかかるかを「観察」し、教えられたり自らわかったことを「記憶」すること」、「色々な技を考えてから実際に試す「試験（実験)」を繰り返し、「想像」力を働かせて既存の技を改良したり新しい技を創造すること」、これらの会得・工夫した技を「言語」によって他者に伝えることを指しており、「大量」とは「他人の考えに柔軟に対応し、様々な考えを分析できる能力」のことを表している(友添, 2001：p.239)。柔道は既存の柔術に見られるような「秘伝の名の下で、一部の者だけが長年月をかけて、理屈ではなく気の遠くなるような無意味な反復練習によってようやく技術を体得できたという運動方法論」(友添, 2001：p.239)ではなく、近代的科学思想に基づいた合理的な説明と稽古を行い、それによって知力をも養うという意図をもった教育体系であった。

これらの合理的な説明を用いた研究・指導は、嘉納の、ひいては講道館柔道の持つ独自性を最も端的に表すものであり、武道の中の他種目と比較して特異であった。その特色については寒川(2014)の研究に詳しく、(1)近代の武道概念の形成に先導的刺激を与えたこと、(2)その体系が武道の他種目にも取り入れられ、それぞれの近代化を導いたこと、(3)武道の中では最初に国際スポーツ化し、その成功が他の武道やアジアの武術の国際化を導くモデルとなったこと、が指摘されている。

しかし、嘉納が意図した全人教育としての側面、つまり稽古を通じて別のことを学ぶという姿勢、考え方については、必ずしも稽古のみで達成せられるものではなく、これらを修行者に伝えるためには、嘉納自身による継続的な啓蒙活動が必要であった。

嘉納は「道場における講義・訓話ばかりでは、一局部に偏して、ひろく教育を普及させることはむずかしい」(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：pp.139-140)と考え、その活路を、「講道館柔道の修行者を主として、さらに他方面にも修養の資料となるべき雑誌を発行したならば、これによりて継続的に、秩序的に、柔道に関する自分の考えを示すことができる。さらにこの仕事に加えて、適当なる機会を利用して、講道館において話をしたならば、やや教育が行きわたるであろう」(嘉納,1927(大滝編, 1972)：p.140)と、雑誌刊行事業に見出していた。雑誌の持つ教育的な効果に期待を寄せたのである。

それでは、その雑誌の誌面とは、一体どのようなものだったのだろうか。

ここでは対象となる雑誌群の発刊時期を確認し、ページ数および価格の変化を図表にま

とめ、その変遷を視覚化する。のちに個々の雑誌について、誌面の傾向と発刊趣旨から、その役割を考察する。

2.　『国士』『柔道』『有効乃活動』のページ数および価格の変化

『国士』の刊行期間は明治 31(1898)年 10 月から明治 36(1903)年 12 月であり、このうち明治 31(1898)年 10 月号から翌年 9 月号までが第 1 巻で、10 月号を境に巻数が変化している。ただし、最終巻の第 6 巻については、明治 35(1902)年 10 月から翌年 12 月号までとされている。

『国士』のページ数の変化は、第 2 巻 9 号（明治 32(1899)年 6 月発行）から 12 号（明治 32(1899)年 9 月発行）での大幅な減少が見られるものの、全体としては穏やかな推移を見せており、本文は 70 ページほどで安定していた。付録扱いの「大日本遊泳術」、講道館記事等を含めた全てのページの平均を取ると、1 号あたり 78 ページほどである。

また、口絵は毎号付いているという性格のものではなく、ないものも多かった。最も多い時は 4 ページ分の口絵が誌面を賑わし、第 1 巻 4 号（明治 32(1899)年 1 月発行）、第 5 巻 40 号（明治 35(1902)年 1 月発行）がこれに該当する。平均すると 1.2 ページ分の口絵が収録されていた。本体価格は定められておらず、造士会の年会費によって賄われた。

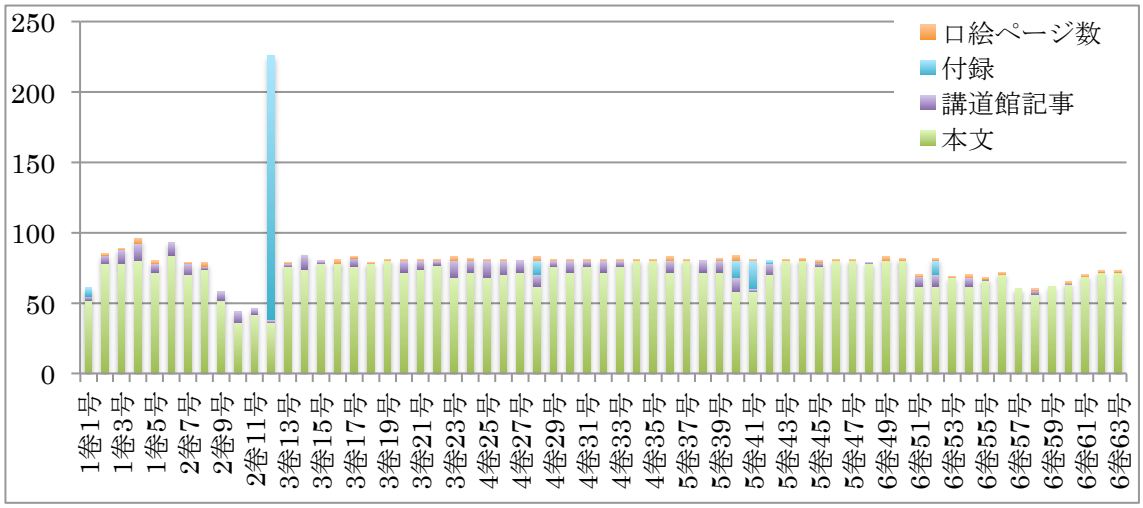

図 1　『国士』ページ数の遷移

『柔道』の刊行期間は『国士』の発刊中止より 11 年後となる大正 4(1915)年 1 月から大正 7(1918)年 12 月である。大正 4(1915)年 1 月号から同年 12 月号までを第 1 巻とし、年毎に巻数が変化する[22]。

『有効乃活動』は『柔道』を改題したのみで内容は変化しないと本誌中に明言されており、刊行期間は大正 8(1919)年 1 月から大正 11(1922)年 3 月である。巻数は『柔道』から継続して数え、大正 8(1919)年 1 月号から同年 12 月号までを第 5 巻とし、年毎に巻数が変化した。大正 11(1922)年 1 月から同年 3 月までは第 8 巻とされた[23]。

『柔道』は刊行後しばらくの間 100 ページ弱程で推移していたものが、第 2 巻 4 号（大正 5(1916)年 4 月発行）の誌面構成の変化に伴い平均 100 ページ強と微増し、第 3 巻 1 号（大正 6(1917)年 1 月発行）の価格改定の折には 140 ページ弱程と大幅に増加した。その後、第 4 巻 2 号（大正 7(1918)年 2 月発行）にページ数の大幅な減少があり、最終的には 80 ページ程となっている。

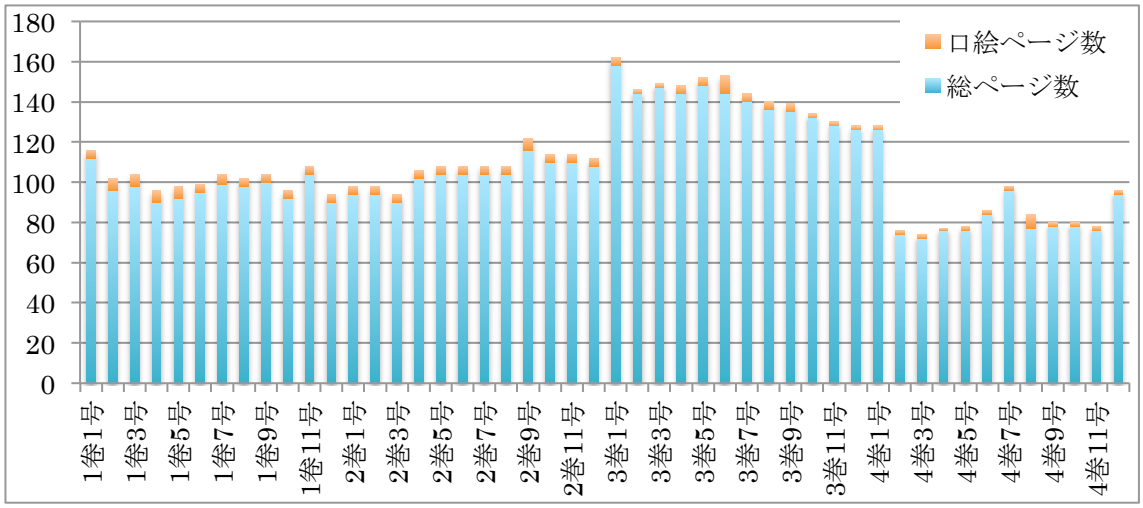

図 2　『柔道』ページ数の遷移

第 4 巻 12 号（大正 7(1918)年 12 月発行）から『有効乃活動』への改題を挟んだ第 5 巻 3 号（大正 8(1919)年 3 月発行）までの 4 ヶ月間は 100 ページ前後を推移するも、第 5 巻

[22] 復刻版については大正 6(1917)年刊行分のページ数が多いため分冊となり、6 月号までが復刻版第 3 巻、7 月号から 12 月号までが復刻版第 4 巻に収録されており、大正 7(1918)年刊行分は復刻版第 5 巻に収録された。
[23] 巻号は、同年 4 月より刊行された『大勢』『柔道界』には継承されなかった。

4 号（大正 8(1919)年 4 月発行）の価格改定以降は減少傾向に転じ、70 ページ弱程の分量での刊行となった。

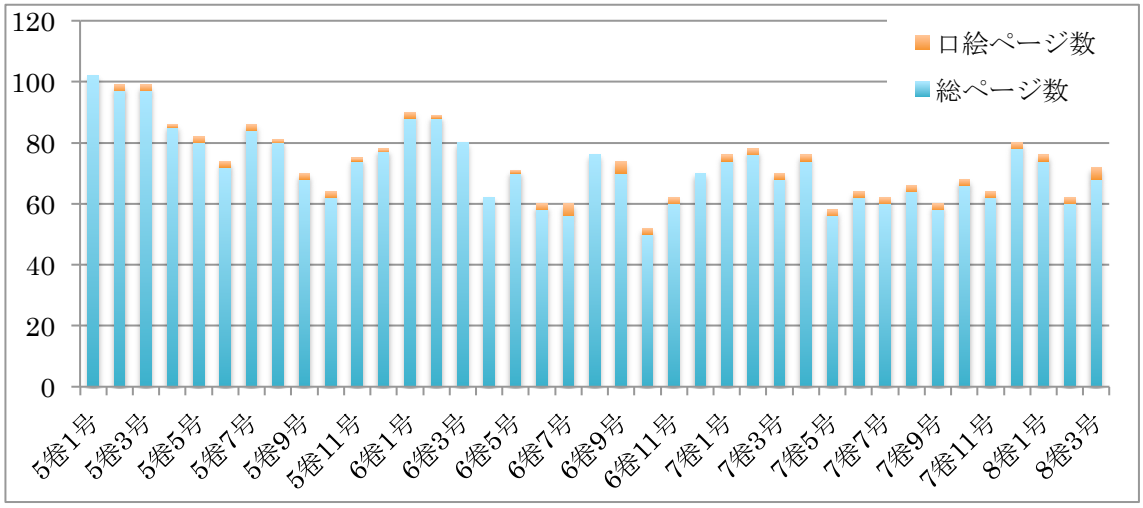

図 3　『有効乃活動』ページ数の遷移

全期間を通じてのページ数平均を比較すると、『柔道』が 106.1 ページ、『有効乃活動』が 71.9 ページと、差が大きいように感じられるが、ページ数の推移をグラフ化すると、減ページ後の『柔道』と『有効乃活動』のページ数には連続性が見られる。

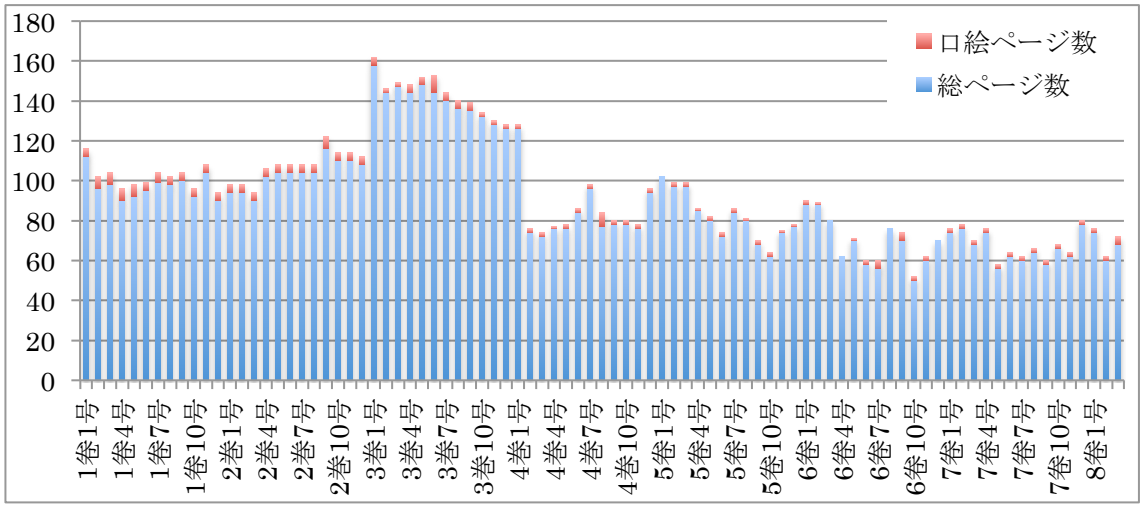

図 4　『柔道』『有効乃活動』のページ数遷移

『柔道』において口絵の数が最も多いのは、「極東競技大会記録号」と副題の付けられた

第 3 巻 6 号（大正 6(1917)年 6 月発行）で、9 ページ分の写真が誌面を飾った。最も少ないのは第 4 巻 4 号（大正 7(1918)年 4 月発行）の 1 ページ分で、全体の平均ページ数は 3.7 ページである。『有効乃活動』においてはその数を減じ、全体の平均ページ数は 1.7 ページとなった。最も多いものでも 4 ページ分で、第 6 巻 7 号（大正 9(1920)年 7 月発行）、同 9 号（大正 9(1920)年 9 月発行）、第 8 巻 3 号（大正 11(1922)年 3 月発行）に収録されている。また口絵がないものは 5 冊に達し、第 5 巻 1 号（大正 8(1919)年 1 月発行）、第 6 巻 3 号（大正 9(1920)年 3 月発行）、同 4 号（大正 9(1920)年 4 月発行）、同 8 号（大正 9(1920)年 8 月発行）、同 12 号（大正 9(1920)年 12 月発行）であった。

『柔道』第 3 巻 1 号（大正 6(1917)年 1 月発行）における大幅なページ数増加の際の価格改訂は、当初設定の 15 銭[24]から 20 銭という大きな変化だった。第 2 巻 12 号（大正 5(1916)年 12 月発行）の書誌情報のページ上部において掲げられた「本誌の拡張と定価の改正」では、誌面の充実を図るため価格を改訂し、ページ数を増加する旨が告知されている。その内容は以下の通りである。

> 青年の意気は愈旺んに、柔道界は益々発展の盛運に向ひました。従つて本誌もまた此の機運に伴ふべく光明ある拡張発展の途を拓かねばなりません。
>
> 恰もよし明春正月は本誌創刊以来第三週年になりますので是れを機会とし明春新年号より大に紙数を増加し内容を改善し拡張発展の実を挙ぐる事と致しました。
>
> 就きましては雑誌代金も亦紙数の増加に伴ふ定価の改定の止むを得ない次第で大正六年新年号より左の如く改定致しました。何卒御承知を願ひます。
>
> 一部　　金二十銭　　（郵税一銭五厘[25]）
> 半ヶ年分前金　　金一円二十銭　　（郵税当方持）
> 一ヶ年分前金　　金二円十銭　　（郵税当方持）
>
> 即ち従来の直接購読者各位の前金は来年一月分より改定定価に切り換へる事に

[24] 料金の詳細は「一冊 十五銭（郵税一銭）」「六ヶ月分前金 九十銭（送料共）」「一ヶ年分前金 一円七十銭（送料共）」とされている（『柔道』復刻版第 2 巻 12 号：p.108）。
[25] 郵税は、第 3 巻 1 号（大正 6(1917)年 1 月発行）においては告知通り 1 銭 5 厘となっているが、翌月以降は 1 銭に変更されている(『柔道』復刻版第 3 巻 1 号：p.158；同 2 号：p.144)。

致しますから、左様御承知を願ひたう存じます。

尚此の切換に依る前金御預り高の現状に就いて往復ハガキにて御紹介下されれば、直ちに御報告申し上る事に致します

（『柔道』復刻版第 2 巻 12 号：p.108）

また、『柔道』第 4 巻[26]2 号（大正 7(1918)年 2 月発行）の大幅なページ数削減については、当月告知された。「彙報」欄の最後に「編集室より申上候」と題して掲載された文章によると、理由としては紙価高騰と、編集上の手違いによる原稿の遅れが挙げられている。ページ数の削減が一時的なものではないことが示され、編集方法の改善によって全体の記事内容の充実は維持する旨が記されている。

本号は思ひ切つて紙数を減じ候。その理由は近時の紙価暴騰につれて雑誌経済の維持上調節の要を見たることが一つ。

更にまた、編集上の手違ひより予定の原稿が間に合はざりし事が一つに御座候。編集者としては甚だ不満足。読者諸兄に対しては慚愧の至りに堪へず候へども、何卒多年の御馴染甲斐に今月の処は御宥免を願上候。

次号よりは紙面を緊縮し、活字の配り方を改め、編集振を一変し、少数紙面中に多数の文字を並列する事に努むべく候。

即ち頁数は少なくとも、記事内容は却つて豊富ならしむべき計画に御座候。

次号よりは更に高橋五段の『返業の研究』、宮川五段の『足業の研究』等も出現の運びに至るべく、水谷竹紫氏執筆の柔道家評伝も稿を次いで『永岡秀一評伝』を掲出し始むべくと存候。

（『柔道』復刻版第 5 巻 2 号：p. 74）

ここで活字の配り方を改め、少数誌面中に多数の文字を並列することに努めるとされているが、同年 3 月号、4 月号のうちには目次に掲載される記事の本数も少なく、また誌面における文字の密度も体感するほど上がってはいない。5 月号、6 月号と号を重ねるに従

[26] 『柔道』は 4 年間の刊行のため、4 年目の冊子は第 4 巻何号となるが、ページ数の多さからか、復刻版は第 3 巻が大正 6(1917)年 1 月号から 6 月号まで、第 4 巻が大正 6(1917)年 7 月号から 12 月号までとなっている。ここでは復刻版ではなく、各号の書誌情報における表記に揃えた。

って徐々に記事の充実が見られ、7 月号においては活字を小さくした上でもなおページ数の増加が見られた。8 月号以降は再び 80 ページ弱程となり、ページ数はこれを平均値として『有効乃活動』へとそのまま推移した。

『柔道』から『有効乃活動』への改題に伴う価格の改定は、前金納入者に対する若干の値下げとして見られた。価格はそれぞれ「一冊二十銭（郵税一銭)」「六ヶ月分前金一円十銭（送料共)」「一ヶ年分前金二円（送料共)」とされている（『有効乃活動』復刻版 1 巻 1 号：p.102)。

『柔道』第 4 巻 12 号（大正 7(1918)年 12 月発行）から『有効乃活動』第 5 巻 3 号[27]（大正 8(1919)年 3 月発行）までは若干のページ数の増加が見られ、100 ページ前後となるが、『有効乃活動』第 5 巻 4 号(大正 8(1919)年 4 月発行)においては 85 ページとなり、明らかな減少となった。同号には紙価の高騰を理由として「本誌値上げ広告」が掲示されている。その全文は以下の通りである。

> 近年諸物価の騰貴と共に紙の価格も非常に暴騰し印刷費も亦大に増して来ました。従つて何れの雑誌も皆疾に値上げを実行して居るのですが、本誌は御承知の通り、営利を目的として居るものでありませぬ故、その内には紙価も旧に復することゝ思ひ、敢て誌代や会費の改正はせずに居つたのであります。然るに、戦争が終熄して諸物価も追々低落しつゝある今日、紙価のみは依然として低下しないのみか、近来益々昂騰する有様であります。さりとて、紙数をさう減ずる訳にも行きませぬ。斯くては如何に営利が目的でないにしても、到底長く之に堪へることの出来ぬのは、賢明なる読者諸君の御諒察にならるゝことゝ存じます。依て本号より余儀なく左の通り値上げをすることに致しました。何卒事情御覧察下さいまして、倍旧の御眷顧を願ふ次第であります。
>
> 定価　一冊　金二十五銭（送料一銭）
>
> 半ヶ年前金　一円二十銭（送料共）
>
> 一ヶ年前金　二円四十銭（送料共）

[27] 『有効乃活動』は『柔道』からの改題であり、『柔道』が 4 年間の刊行であったことから、大正 8(1919)年刊行分の書誌情報における表記は「第 5 巻何号」、以降の年についてもそれぞれ「第 6 巻何号」、「第 7 巻何号」となっている。ここでは書誌情報における表記に揃えた。

既に御払込みになつて居る会費及び前金の不足は便宜御送付あらんことを希望致します。

大正八年四月一日　柔道会

（『有効乃活動』復刻版 1 巻 4 号：p.85）

ページ数はその後 80 ページ前後を推移するが、第 5 巻 9 号(大正 8 年 9 月発行)において再び「謹告」として書誌情報のページに価格改定の告知が掲示され、68 ページにまで減少した。この時の提示価格で一旦安定し、これ以降の改定は行われていない。告知の全文は以下の通りである。

今般諸物価騰貴につれて印刷料値上げに相成候に付東京雑誌協会の決議に拠り十月号より左の通り本誌代金も値上致間此段御諒承願上候

一部定価金　　三十銭（郵税一銭）

半ヶ年前金　　一円五十銭（郵税共）

一ヶ年前金　　三円（郵税共）

大正八年九月　柔道会

（『有効乃活動』復刻版 1 巻 9 号：p.68）

以上が初期の講道館雑誌群のページ数および価格の変化である。これまで見てきたように、ページ数や価格の変化は必ずしも改題のタイミングと一致せず、個々の事情により複数回にわたってその改革が行われたことが確認された。

ここでの調査を元に、雑誌名、ページ数、価格の改定および誌面構成の変化[28]によって細かい区分を設け、『講道館百三十年沿革史』に倣って初期の雑誌群の変化をまとめると、以下のようになった。

[28] 『柔道』は第 2 巻 4 号において誌面の改定を行っており、また編集者が変わった旨の告知もされていることから、ここに明確な変化があったと見なし、区分を設けた。変化の詳細は後述する。

表 3 初期雑誌群の編集兼発行者・発行所・平均頁数・定価の変遷

誌名、刊行時期	発行者兼編集者	発行所	頁	月額定価
国士(M31.10-M36.12)	富田常次郎	造士会仮事務所[29]	78.4	年会費に含む
柔道(T4.1-T5.3)	小田勝太郎	柔道会本部	96	15 銭
柔道(T5.4-T5.12)	小田勝太郎	柔道会本部	107	20 銭
柔道(T6.1-T7.1)	小田勝太郎	柔道会本部	139	20 銭
柔道(T7.2-T7.12)	小田勝太郎	柔道会本部	80	20 銭
有効乃活動(T8.1-T8.3)	小田勝太郎	柔道会本部	98.7	20 銭
有効乃活動(T8.4-T8.8)	小田勝太郎	柔道会本部	80.2	25 銭
有効乃活動(T8.9-T11.3)	小田勝太郎	柔道会本部	68	30 銭

なお、誌名毎に平均値を取ると以下の通りである。

表 4 初期雑誌群の編集兼発行者・発行所・平均頁数・平均定価の変遷（誌名別）

誌名、刊行時期	発行者兼編集者	発行所	頁	月額定価
国士(M31.10-M36.12)	富田常次郎	造士会仮事務所	78.4	年会費に含む
柔道(T4.1-T7.12)	小田勝太郎	柔道会本部	106.1	17 銭 5 厘
有効乃活動(T8.1-T11.3)	小田勝太郎	柔道会本部	71.9	29 銭

3. 『国士』の誌面傾向

「はじめに」で引用した大滝忠夫編『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』は、『作興』の連載記事「柔道家としての嘉納治五郎」を底本としている。連載時に筆録を担当した落合寅平は、註釈や解説をも執筆しており、特に『国士』については、発刊趣旨の概要と寄稿者について落合の視点から詳述されているため、ここに再掲し、いかなる雑誌であったかを理解する助けとしたい。

[29] 『国士』復刻版第 1 巻に収録された「国士総目次」による。

雑誌『国士』は、明治三十一年十月にその第一号が発行せられている。一体、この雑誌は造士会の機関雑誌として世に出たもので、きわめて内容の充実した、青年修養雑誌であった。造士会の規則を見ると、真先に、

第一条　本会ハ造士会ト称シ少壮ノ者ヲ指導シテ立身ノ方針ヲ定メ心身ヲ鍛錬セシムルヲ以テ目的トス

と定めてあって、造士会というのは、少壮者指導をもって任とした会であったのである。その事業として左の三種をあげている。

一、塾舎ヲ設ケテ本会ノ趣旨ニ基ヅキ子弟ヲ監督薫陶スルコト

二、道場ヲ開キテ講道館柔道ヨリ始メ漸次諸般ノ武芸体操ヲ教授シ之ヲ奨励スルコト

三、雑誌ヲ発行シテ本会趣旨ノ貫徹ヲ図ルコト

この三事業の一つとして「国士」は発行せられたのである。いうまでもなく、嘉納師範が造士会長として、主幹となり、村川博士[30]、亙理教授[31]等が、当時、少壮気鋭、その溌剌たる元気をもって編集の任に当たられ、本田[32]・吉田[33]・磯田[34]・和田[35]・桜井[36]・中島[37]その他の高等師範の教授達はいうにおよばず、高島平三郎[38]・手島精一[39]・肝付兼行[40]・大槻文彦[41]などという歴々の名が、初めからだんだん論説欄にあらわれ、朝野の名士が争うて造士会の目的に賛成し、力を添えたというように見えた。(・・・)

(落合,1927(大滝編, 1972)：pp.146-147)

---

[30]村川堅固(1875-1946)。
[31] 全一塾塾長、亘理章三郎(1873-1946)。
[32] 本田増次郎(1866-1925)。
[33] 吉田貞雄(1878-1964)。
[34] 磯田良(1867-1924)。
[35] 和田猪三郎(1870-1962)。
[36] 櫻井寅之助、生没年不詳。『国士』第 22 号(明治 33(1900)年 7 月発行)に「氷に就きて」を寄せており(『国士』復刻版第 3 巻：pp.752-755)、著書に『化学教科書 師範教育』、『野鳥語 欧米土産』等（国立国会図書館デジタルライブラリー所蔵)。
[37] 中島半次郎(1872-1926)。
[38] 高島平三郎(1865-1946)。
[39] 手島精一(1850-1918)。
[40] 肝付兼行(1853-1922)。
[41] 大槻文彦(1847-1928)。

ここに名前の挙がっている人物はいずれも主として嘉納の人脈によって執筆協力を得たものと考えられ、啓蒙的もしくは講義的な記事が多く、発刊の主旨に則った雑誌であったと見ることが出来る。

落合は『国士』刊行当時の読者であり、当時を振り返って以下のように記している。

> 記者（横井注：落合自身）のごときは、当時、高等師範を出たばかりの頃であったから、喜んでこの雑誌を購読し、次号をまちかねてよみふけったものであった。
>
> もちろん多くの青年にも熱心にすすめた。その休刊になったときに、なぜこういう真面目なよい雑誌をやめたのであろうかと、すこぶる不満を抱いたことが今なお記憶に新である。その後記者は、この国士ほど強い印象を残した青年雑誌にあわないようにおもう。まことによい雑誌であった。この頃、文化会事務所で、ふるい「国士」を引き出して見て、いまさらに昔の思い出に耽った。そして、記者の記憶が間違っていなかったことをたしかめ、さらに、今日において、あの「国士」のように徹頭徹尾真面目で、しかも趣味はしんしんとして紙面に溢れ、加うるに、颯爽たる意気のおのずから読者にせまるを覚えるといった青年修養雑誌がほしいとおもった。
>
> (落合,1927(大滝編, 1972)：p.147)

『国士』はその誌面において、造士会と講道館とがはっきりと分けられており、柔道の技術的な記事や講道館に関する記事は「講道館記事」として本文とは別にページ番号を振られていた。本文中で柔道もしくは武道、スポーツ等に言及された記事のうち、主なものを挙げると以下の通りである。（初出順）

(1) 嘉納虎太郎抄訳「西眼に映ぜる柔道（ラフカディオ、ヘルン氏の所観）」(『国士』第1巻5号(明治32(1899)年2月発行) 『国士』復刻版第1巻：pp.351-357)

(2) 金井啓一「剣術の効益」(『国士』第1巻1号(明治31(1898)年10月発行)より2号(同年11月発行)まで連載) 『国士』復刻版第1巻：pp.37-39；pp.112-114

(3) 「サンダウの体力養成法に就て」(『国士』第1巻1号(明治31(1898)年10月発行)『国士』復刻版第1巻：pp.28-31

(4) 「サンダウの体力養成法」(『国士』第1巻2号(明治31(1898)年11月発行)より7号(明治32(1899)年4月発行)まで連載)『国士』復刻版第1巻：pp.105-；pp.189-；pp.279-；

pp.443- ; pp.540-544

(5) 高橋雄次郎「野球仕合原規則」(米国原規則の翻訳)(『国士』第 3 巻 17 号(明治 33(1900)年 2 月発行)より 23 号(同年 8 月)まで連載) 『国士』復刻版第 3 巻 : pp.348-359 ; pp.458-462 ; pp.538-547 ; pp.606-613 ; pp.691-696 ; pp.755-762 ; pp.841-849

(6) 池ノ端 雷音(投)「内外人野球仕合」(『国士』第 3 巻 22 号(明治 33(1900)年 7 月発行)) 『国士』復刻版第 3 巻 : pp.769-778

(7) 「サンダウ体力養成法に就て[42]」(『国士』第 5 巻 48 号(明治 35(1902)年 9 月発行) 『国士』復刻版第 5 巻 : pp.938-945

(8) 「相州松輪及び上宮田に於ける造士会遊泳場」(『国士』第 3 巻 24 号(明治 33(1900)年 9 月発行)) 『国士』復刻版第 3 巻 : pp.931-941

(9) 「造士会水術練習記」(『国士』第 4 巻 36 号(明治 34(1901)年 9 月発行) 『国士』復刻版第 4 巻 : pp.916-934 ; (『国士』第 5 巻 48 号(明治 35(1902)年 9 月発行) 『国士』復刻版第 5 巻 : pp.921-938 ; (『国士』第 6 巻 60 号(明治 36(1903)年 9 月発行) 『国士』復刻版第 6 巻 : pp.811-824

また、付録扱いとなっているが、大量のページが割かれているものには「大日本遊泳術」(『国士』第 2 巻 12 号[43](明治 32(1899)年 9 月発行)付録 『国士』復刻版第 1 巻 : p.832 以降(ページ数記載なし)) がある。

造士会の各塾舎の要項において、特に柔道をやるように示されているのは嘉納塾のみということもあってか、『国士』の誌面においても特に柔道が重く取り上げられるといった様子は見られず、様々な身体運動を紹介し、また奨励していた。特に水術については、上記のような指南書や水泳大会の記事が掲載されており、力を入れていたことが看取される。

『国士』の誌面は段組や挿絵等を殆ど用いず、文章の羅列によって構成されていた。記事が変わる際にページを改める・題字や装飾によって目立たせる、といったことはされて

---

[42] 彙報に「此頃本法の効力に就て疑を抱き、之を行ふの可否に就て云々するものある由聞き及びたるも、此等の説は単に想像に出でたる一家言に過ぎず」として、同年 6 月 7 日の『萬朝報』英文欄に掲載されたという投書を翻訳、掲載している。

[43] 『国士』復刻版では『国士』9 号付録と記載されている。『国士』は 10 月から刊行されており、通し号数でいうとこの号は 12 号に該当するが、2 年目の 9 冊目という意味では第 2 巻 9 号となるため、そのまま記載されたものと考えられる。

おらず、各号の目次[44]や中表紙、奥付[45]も存在しない。これらは『柔道』刊行時に徐々に整備され定着していったが、『国士』の頃にはまだ雑誌としての体裁が整っていなかったと言える。

『国士』は第 63 号をもって刊行中止とされた。嘉納は巻頭言「国士」において、「国士の刊行中止に就て」と題し、その理由を述べている。まず「少壮子弟の身を修め材を達し世に処し、凡そ国士たる所以の道は、大要之れを説き尽くしたりと信す。」(嘉納, 1903 : p.143)と、これまでの事業を評価し、次に「有益にして興味ある知識を紹介するがごときは従来本誌の執り来たれる一事業に属すれども近時この種の雑誌の世に出づるもの少からずして、必ずしも本誌に頼るを要せざるに至れり。」(嘉納, 1903 : pp.143-144)と、雑誌刊行は必ずしも切実の課題ではないとの考えを示している。最後に「近来余が身辺には公私の事業蝟集し来たりて、勢自ら本誌を経営するに専なるを得ず、編集の事のごとき多くは之れを他に委するの已むを得ざるに及べり。」(嘉納, 1903 : p.144)として、他の事業との兼ね合いから『国士』を発行中止する旨が記されている。

『国士』の編集者については誌面で明らかにされておらず、先に落合によって名を挙げられた村上、亘理らが編集作業を担当していた時期は判然としないが、上記の記述から、初期には嘉納自身も編集に携わっていた可能性が示唆され、また最終号の頃には編集作業の多くが他の担当者へ委任されていたことが明らかとなった。

4. 『柔道』『有効乃活動』の誌面傾向

『柔道』はその発刊に際して、「柔道会々長 嘉納治五郎」名義で「『柔道』発刊に就いて」という記事が掲げられており、その意図と誌面の構成について言及されている(嘉納, 1915)。雑誌発刊の意図については、この後に記載される「「柔道会」創立の趣旨」に詳述された[46]。

---

44 半年毎に「国士総目次」が用意され、復刻版においても本文の前に収録されているが、これらは各号別ではなく、記事種類別にそれぞれまとめてページ数が表記されており、のちに定着する各号別の目次とは様子が異なる。なおこの総目次は『柔道』刊行当時にも作成され、第 1 巻まで付与されていた。

45 発行所、編集者兼発行人、発行日等をまとめたページで、本文の最後に記載されていることが多い。書誌情報。

46 「柔道会」創立の趣旨については参考資料に全文を掲載した。

当初掲示された記事の分類と個々の内容・目的は以下の通りである。

(1) 主張欄…国民の針路を指導し、修養の方法を示す
(2) 時勢欄…日本及び世界の実状を記述し、世界及び日本の大勢を知らせる
(3) 柔道本義欄…柔道の精神を正しく伝え、技術の伝習に於いて誤りがないようにする[47]
(4) 学芸欄…重要な学説及び技芸に関する事項を集録して知見の発達に資する
(5) 詩文評釈欄…道義を鼓吹し士気を振作する古今人の詩文を解釈し理解させる
(6) 雑録・彙報…柔道及び剣道・遊泳・体育又は社会百般の出来事を知らせる
(7) 質問応答欄…柔道に関する事もしくは本誌掲載内容に関する嫌疑への対応

(嘉納, 1915：pp.1-2)

前項で参照した『作興』(1924-1938)の連載記事「柔道家としての嘉納治五郎」において嘉納は、上記の発刊趣旨に基づいた各欄の説明と「主張欄」の題名の引用によって『柔道』がどういった雑誌であったかを示した上で、発行部数という側面からその事業を振り返っている(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：pp. 148-156)。ここに引用し、理解の助けとしたい。

> （・・・）以上述べ来った通り、主張に、解説に、報道に、あらゆる方法によって、柔道の宣伝に対し、所期の目的を達しようと努力したのである。自分は海外旅行で不在のほかは、いつも自ら筆を執って所信を唱道したのであるが、同志の士もまた、その学識と体験とを傾けて、熱心に援助せられたのである。編集者も、できるだけの精力を注いだことはいうまでもない。しかるにこの雑誌の普及については、どうも思うようにいかぬ。始め柔道会員四千ほどもあったものが、ようやく会費未納等のためにその数を減ずるようになり、新入会員数の増加も所期に達せず、われわれの努力は、雑誌発行部数の上には一向報いられない。雑誌の発行はたいてい五六千以上出なければ損失を免れないものであるから、われわれの機関雑誌も、もちろん、損失に損失を重ねてきた。しか

[47] 「今日柔道の普及は喜ばしい事であるが、併し柔道の精神は此の普及に伴つて伝つて居るとは云へない。又技術に於ても往々間違つた事が行はれて居る有様であるから、柔道の精神を正しく伝へ又技術の伝習に於ても誤のない様にするは今日最も大切な事である。そこで本誌は柔道本義欄を設け柔道の精神を説き形及び乱捕の正格を詳解し講道館柔道を最も正しき形に於て世に紹介しようと思ふ。」(嘉納, 1915：pp.1-2)

しながら、倦まず、屈せず、ますます努力を続けて、大正十一年の春まで、いぜんとして、会を維持してきたのである。この間、雑誌「柔道」を「有効乃活動」と改題したのであるが、そのために、別に変わることはなかった。(・・・)

(嘉納, 1927(大滝編, 1972) : p. 155)

『国士』と『柔道』の最大の違いは、柔道の宣伝普及を目的としているか否かという点である。各欄の整備は行われたものの、記事の執筆者や内容の傾向が『国士』と似ていた初期の『柔道』は、その刊行期間中に徐々に雑誌としての体裁を整え、また内容面でも変化が見られた。これらの変化は、嘉納をはじめとした執筆者、編集者の努力の様子を表していると言えよう。では、具体的にはどのような変化が見られたのだろうか。

『柔道』の雑誌としての体裁を確認すると、まず、『国士』の時には存在しなかった各号の目次が創刊号から付与されている。当初は欄毎に記事名と著者名が記されるのみで開始ページの表記がなく、目録としての性格が強いものだったが、第 8 号（大正 4(1915)年 8 月発行）より記事の掲載ページが併記されるようになり、検索性が向上した。

書誌情報については創刊号から最終ページに記載されるようになり、発行日、価格、発行者兼編集者、印刷者等が確認できる[48]。第 2 巻 4 号（大正 5(1916)年 4 月発行）にはこの記載方法が変更され、以降踏襲されるようになった。同号より導入された中表紙は、表紙・広告・目次と本文とを明確に分ける役割を果たし、この中表紙を 1 ページ目として通しページ番号が振られるようになった。

目次の整備や各記事の見出しの強調は、各記事の検索性を向上し、目的の記事を探し出してそれだけを読みたいという読者の欲求を満たすものである。書物のように一冊を通読するという読み方から、関心のある記事だけを拾い読みするという読み方への変化を見ることができる。

『柔道』はまた、その表紙が毎号のように変わる時期があったという点で、講道館雑誌群の中でも特異な存在である。発刊当初は嘉納による題字を印刷したものを用いていたが、

---

48 『国士』においてこれらが整備されていなかったことの理由としては、機関誌としての性格が強く、雑誌単体での販売は原則的に考えていなかったであろうことが考えられる。雑誌の価格が造士会費に含まれていたこともその裏付けとなろう。

第２巻１号（大正 5(1916)年１月発行）より写真を用いてデザインされたものに変わり、さらに第２巻５号（大正 5(1916)年５月発行）には「輓近印刷術の進歩による二色版の応用にして、今までの日本の雑誌には未だ試みたるものなき新天地に有」(『柔道』復刻版第２巻８号：p.104)との謳い文句と共に多色刷りの全面印刷が用いられ、この表紙が同年７月号まで続いた。第２巻８号（大正 5(1916)年８月発行）以降は雑誌名と版画のような絵を組み合わせたものへと変化し、版画部分を差し替えて同９号の表紙を飾った後、第２巻 10 号（大正 5(1916)年 10 月発行）には一枚絵のような全面印刷が用いられている。

第２巻 11 号（大正 5(1916)年 11 月発行）においては同８号・９号のデザインを基に絵の部分を差し替えたような表紙へと変わったが、第２巻 12 号（大正 5(1916)年 12 月発行）では再び全体のバランスが見直され、雑誌名が大きな文字で左側に配置され、右側の 1/3 程がパターン布のような絵によって占められた。このデザインは、絵の部分を毎月差し替えながら第３巻４号（大正 6(1917)年４月発行）まで続いたが、第３巻５号（大正 6(1917)年５月発行）からはまた絵や写真を基調としたデザインとなり、同８号までは毎月新しく描き起こされた。第３巻９号（大正 6(1917)年９月発行）には、題名を配したデザインにお面のような絵を組み合わせた表紙へと変化し、同 12 号まで絵を差し替えながら用いられた（同 10 号においてはお面の絵ではなく、動物の絵が用いられている）。

このように表紙がよく変えられた『柔道』であったが、第４巻１号（大正 7(1918)年１月発行）には文字を主体としたデザインに改められ、以降は表紙の変更はされず、改題まで同一のものが用いられた。『有効乃活動』は『柔道』刊行当初と同様、嘉納の筆になる題字が印刷され、これが毎月用いられた。第６巻１号（大正 9(1920)年１月発行）および第６巻３号（大正 9(1920)年３月発行）以降の全ての号においては題字の上部に「柔道宣伝」の文字が掲げられている。表紙の変化は雑誌の持つ情報の新規性を視覚に訴えるものと考えることが出来、ここにも柔道の宣伝に対する努力の一環を見ることができる。

『柔道』から『有効乃活動』への改題に際しては、『有効乃活動』第５巻１号に「改題の趣旨」および「編集の最後に」が掲げられたが、いずれも改題は内容の変更を伴わないことが強調され、寧ろ「柔道」と「有効の活動」が示すものが同じであるということを印象付ける文面となっている。また、連載記事もそのまま継続して掲載された。

『有効乃活動』に掲載された内容は以下の通りである。

今や世界の大戦も、休戦の條約成立して、遠からずして将に平和條約も締結せられんとするの時機になつた。今後我国民の覚悟は尋常一様ではいかぬと思ふ。

我が柔道会は創立以来柔道の主義に基いて、一面柔道の技術的方面に於ける指導をなすと共に、国民が挙つて其の心身の力を出来る丈け有効に使用するやうにあらしめたいとの希望より、断えず其の精神を力説し来つた。思ふに此の柔道の主義は将来益々我が国民に取つて必要なるものとなるであろう。乃ち吾人は成可く多数の人に此の趣旨の一層明瞭に了解し得らるゝやう年の改まると共にこゝに題号を新たにして『有効の活動』とした。

『有効の活動』は柔道の別名に外ならぬ、故に其の精神に於ては従来と何等異なる所がない。否将来益々此精神を鼓吹するに便ならしめんがために、特に改題を敢てしたに過ぎない。読者庶幾は吾人の趣旨の存する所を誤ることなく、益々努めて此の精神を体得すると共に、本会の事業をして彌々盛ならしむるやう援助せられんことを、改題の趣旨を一言すること爾り。

大正八年一月一日　柔道会

（「改題の趣旨」『有効乃活動』復刻版 1 巻 1 号：p.1 (傍点原文)）

（・・・）本会が『柔道主義』の宣伝を標榜して雑誌『柔道』を創刊してから丁度今年は五週年である。幸ひにも読者諸賢の厚き御同情と御援助とによつて日に増し盛大になり、今や本誌は日本内地は固より遠く朝鮮満州南洋方面より南北亜米利加、欧羅巴と殆んど全世界に亘つて多数の読者を有するやうになつた。

本年は本誌の創刊五週年に当ると友に恰も大戦乱が収まつて世界の大変転期に際会したのであるから、本誌は之を好機として題号を柔道の真意義を現はしたる『有効の活動』といふことに改め、内容の上にも一層の改善を図り、以て益々本誌の本領を発揮し読者諸賢の期待に添ふやうにしたいといふ希望である。

故に『柔道』と『有効の活動』とは決して別義でない一を表とすれば他は裏、彼を現象とすれば是は本体である。只吾人は総ての人の了解し易きを欲して改題したにすぎない。其の主義その精神に於て何等の変化あつた訳ではない。

即ち本誌は此の意味によつて将来、時事を論じ修養を説き、学術技芸を論評紹

介し、一面柔道の技術的方面の研究報道を怠らぬと共に、他方に其の真精神の普及に努める積りである。

只だ新年号は之に対する施設未だ十分ならず、所期の一半をも蓋すことの出来なかつたのは読者諸賢に対して甚だ申訳ない次第であるが、本誌の期する所は以上の通りであるから漸次改善に努力して諸賢の期待に背かぬやうにする考である。(・・・)

(「編集の最後に」『有効乃活動』復刻版 1 巻 1 号：p.102)

雑誌に掲載されている記事の内容的な変化は、『柔道』誌上においてより顕著であった。これについては章を改め、第 2 章において検討する。

先に引用した通り、嘉納をして「あらゆる方法によって、柔道の宣伝に対し、初期の目的を達しようと努力した」と言わしめたにも関わらず、これらの柔道会刊行雑誌の発行部数は伸び悩み、普及は思わしくなかったという(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：pp. 155-156)。嘉納自身による理由の考察は以下の通りである。

この雑誌は、その内容において勝れたものであることは、世人の認める所であったにかかわらず、なぜその普及において思わしくなかったであろうかと考えて見るに、一つには、ことさらに広告宣伝をしないから、世の中に行きわたって知られないという点がある。第二には、坊間の雑誌のように、人気取りの記事をのせない。即ち栄養価値は少なくも、普通、人が容易に喰いつきそうなものを余りのせない。つまり、硬いものばかりを収めているということが、雑誌の売れない大なる原因である。第三には、世の中の柔道家は多く読書子でない。文字に親しむということには不得意である。そのために、まず読んで貰いたい、また読まねばならぬはずの柔道修行者、その数からいえば万をもって数うる多数のこれら修行者の、ほんの一部分しか、手に触れないという実状にある。これはいかにも残念なことである。第四には、編集者にも責がないとはいえぬ。即ちいろいろの事情にたいして、適当なる編集のしかたにおいて、まだ拙劣であったとはいわなければならぬ。

大要、以上のような原因によって、雑誌が売れないのであろうが、一方世の

趨勢を見ると、柔道修行者にたいしてはもちろんのこと、一般、世人にたいしても、真の柔道の宣伝は、いよいよますますその急勢なるを感ずる。さればといって、世に迎合して主張をまげ、屑物を売り出して、発売部数をにわかに多からしむるがごときことは、なんらの意義のないことで、とうていなし得る所ではない。経済上の損失のごときは、有効なる活動にたいして、もとより意とするところでない。ますます進んで活動を続けなければならない。ただ、正しき道を失わず、もっとも有効なる方法によって、なるべく多くの人々に宣伝の出来るように努力せねばならぬ。この精神は終始一貫して変わらないのである。

(嘉納, 1927(大滝編, 1972)：pp. 155-156)

雑誌を刊行することによって、柔道の修行者に対する教育をより厚く施す、という当初の刊行意図は当てが外れた格好となったが、内容的には嘉納も自信を持っていたということが分かる。ここで編集者の責任について言及されていることから、記事内容のみならず編集方法についても様々な工夫がされていたと言えよう。それでは、その具体的な記事内容の変化はどのようなものだったのか。

これについては章を改め、次章において考察する。

第２章　雑誌『柔道』の内容分析

『国士』は造士会会員を対象に刊行された青年修養誌であり、教育・啓蒙的色彩が強く、柔道に関する記事は少なかった。これに対して、『柔道』は柔道の修行者および一般の読者を想定しており、『国士』の内容に加えて講道館柔道の技術的な解説が連載されている。

『国士』においては、嘉納の人脈を頼った人物による署名記事が多く寄せられていたが、『柔道』では刊行時期によって執筆者が移り変わり、嘉納の人脈とは異なる人物たちからの寄稿が多く見られた。執筆者の変化は内容の変化にも連なる。雑誌『柔道』の誌面変化は、読者獲得のための努力の一環であり、執筆者の変化もその一部であったと言えよう。ここでは具体的にどのような変化があったのかを見るため、執筆者と記事内容、語り口の面から記事を分類し、その傾向について若干の考察を加えた。

1.　『柔道』『有効乃活動』の執筆者の傾向

『柔道』『有効乃活動』における誌面の変化のうち、記事の語り手が誰であるかということに注目し、各号の署名記事を肩書きの有無および種類によって三種類に分類し、グラフ化した。ここでの分類は(1)社会的な地位を示す肩書きを伴うもの、(2)段位を示す肩書きを伴うもの（社会的地位を併記している場合を含む）、(3)肩書きを伴わないもの、である。

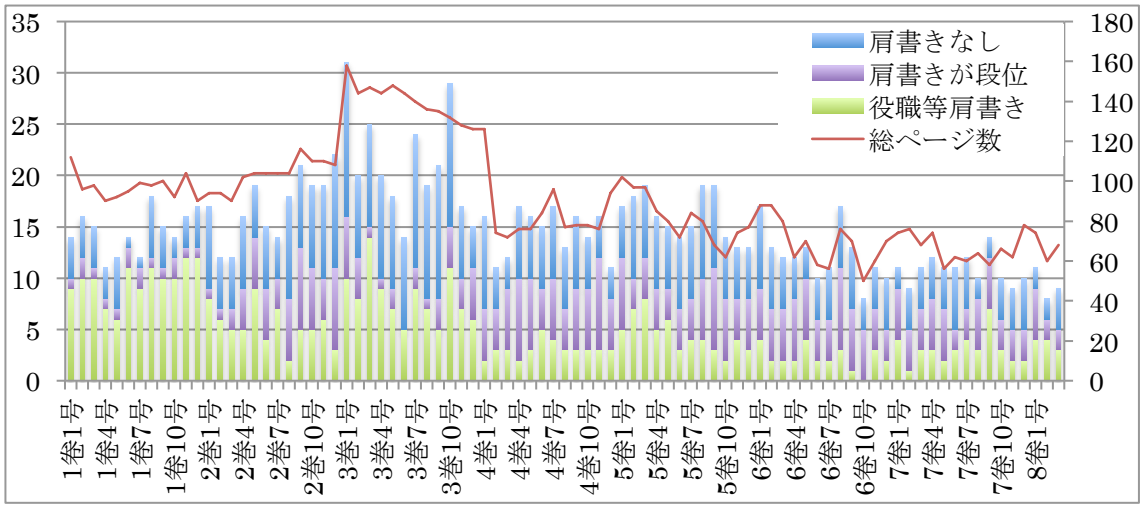

図 5　『柔道』『有効乃活動』署名記事の本数（号別）

当初、社会的地位を示す肩書きを持つ執筆者の多かった『柔道』は、第 2 巻 4 号（大正 5(1916)年 4 月発行）以降は段位を伴った執筆者に徐々に取って代わられるようになる。段位を伴う執筆者は第 3 巻 3 号（大正 6(1917)年 3 月発行）頃に一時減少するが、第 3 巻 9 号（大正 6(1917)年 9 月発行）以降は再び増加傾向となり、署名記事の過半数が段位によって自身の肩書きとして誌面に意見を表明するようになった。当初、段位を表明している執筆者は「柔道形解説」の山下義韶（七段）、永岡秀一（七段）、村上邦夫（五段）のみで、新免伊祐や大隅桂巌による旅行記が時折寄稿される程度であったが、第 2 巻 3 号（大正 6(1917)年 3 月発行）に山崎亘（四段）が稽古記を執筆し、その後継続的に寄稿するようになると、横澤正督（四段）、高橋数良（五段）らも続いて演武会や柔道の技に関する記事を執筆するようになり、次第に様々な人物が柔道についての記事を寄せるようになった。

この変化について、『柔道』のみを取り出したグラフは以下の通りである。

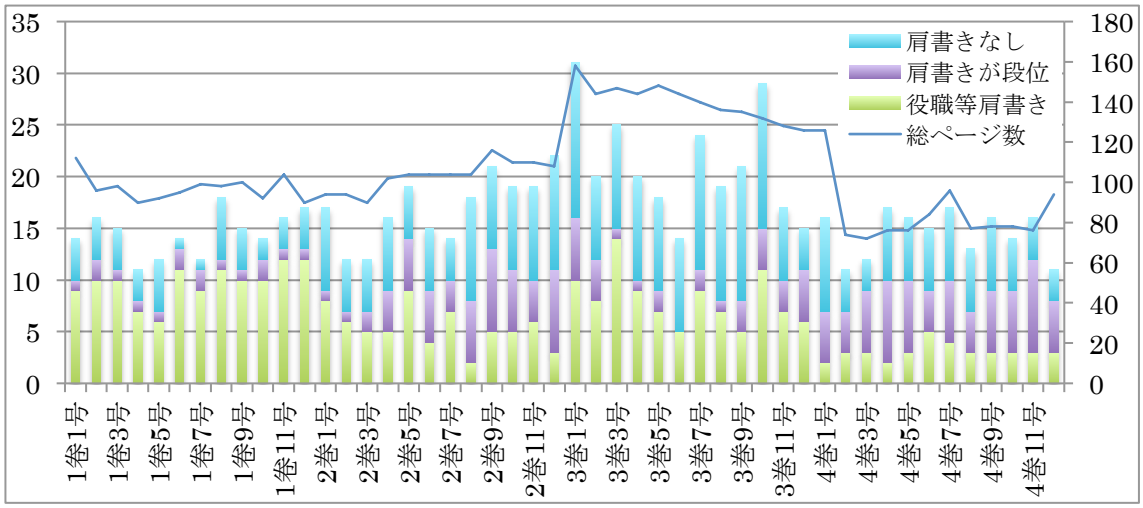

図 6　『柔道』署名記事の本数（号別）

この誌面の変化が見られた『柔道』第 2 巻 4 号（大正 5(1916)年 4 月発行）では、最終ページに「編集の最終に」と題する文章が掲載され、『国士』においては存在を主張しなかった「編集者」が、初めて固有の名前を伴って誌面に登場した。

> 嘉納先生の命によって、本号から本誌の編集に当ることになりましたところ、折悪しく病魔に犯され、三十日余も病床の人となり、種々の計画もすっかり水泡に帰し、僅に病床に筆を呵して漸く編集を終った体たらく、蕪雑不振貧弱の

点は、何卒悪しからず御諒察を願いたいと存じます。

五月号よりはこの代償的にも大奮励を試み、全然誌上の面目を一新し、趣味と実益とを充溢し多大の発展を以て読者諸兄に見ゆる所存で御座いますから、何卒然るべく御吹聴に預りたく、尚『一般運動界消息』『社会時事』は紙面の都合上、本号丈休載し、来月号よりは更に一段の工風を凝らして御清覧を仰く事に致します。

次号から新設の諸欄に就いては、第四十六頁に誌告を掲げて置きましたから、是非とも御一覧の上盛にご寄稿を仰ぎます。（竹紫）

（水谷, 1916（『柔道』復刻版 2 巻 4 号）: p.92 (傍点原文)）

ここで言及されている誌告を確認すると、「次号から新設の諸欄」とは「有段者の消息」、「柔道界茶ばなし」、「「柔道」読者くらぶ」を指し、この他にも「各学校柔道部の紹介」、「各道場の紹介」、「俳句及び短歌」、「感想文小品文」、「大会記事及び試合の記事」、「柔道会に関する各種の通信」、「柔道に関する各種の質疑」について寄稿を求める旨の文章が掲載されている(『柔道』復刻版第 2 巻 4 号 : p.46)。同 5 号（大正 5(1916)年 5 月発行）においては「柔道界茶ばなし」「読者倶楽部」「柔道俳壇」の他、連載記事「各学校柔道部評判記」の第一回目となる「精神的色彩の濃い早稲田大学」、同じく連載記事「柔道家評伝」の第一回目となる「努力の人山下七段」等が掲載され、表紙の変更と相俟って誌面が一新されたという印象の強い号となった。

この「編集の最終に」の末尾に付された「竹紫」とは、明治 41(1908)年に早稲田大学の安部磯雄(1865-1949)を主幹として刊行された雑誌『運動世界』(1908-1914[49])の創刊から明治 43(1910)年 6 月までの 2 年間にわたって主筆を務めた人物、水谷武の筆名である。

『柔道』で新設された「柔道界茶ばなし」というコーナーは、柔道の指導者たちの日常のエピソードや小話を集めた娯楽色の強いものとなっているが、これは水谷が『運動世界』で執筆していた「茶ばなし」の、いわば柔道バージョンと言える。傍点による文字の強調の仕方、段組み、写真と組み合わせた誌面構成や各記事の見出しの飾り方など、『運動世界』

[49] 第 1 号（明治 41(1908)年 4 月発行）から第 56 号（大正 3(1914)年 5 月発行）までは発行されていたことが確認され、また第 56 号においては寄稿を呼びかける記事も見られるため廃刊には至っていない様子だが、実物を確認出来ていない。

と共通する要素が『柔道』の誌面にも見られるようになるが、この変化は水谷の起用によって齎されたものであった。記事の傾向は水谷の趣味内容と符合しており、また執筆者についても、水谷の出身校である早稲田大学に関連した人物が度々登場している。

「編集の最後に」は第 2 巻 5 号（大正 5(1916)年 5 月発行）においても再び掲載され、「愛読者諸兄！」という呼びかけから始まる、明るいものとなっている。「爛漫の花も既に散り果てゝ、天地はいつの間にか新緑の清々しき心境を描き出し申し候。此時に当つて、本誌もまたその装を新たにし更めて読者に見ゆる事を得たるは頗る快心の至りに御座候。（中略）本誌の新面目は固より表紙や体裁のみにはあらず、内容に於ても趣味と実益を併立せしめ独り柔道界の権威たるのみならず、汎く青年雑誌の権威者たらしめんと計画罷在候。固より今日に於ては未だ施設の一半をも蓋さず、予期の十分一にも達せざれど、希くば愛読者諸兄の有力なる御援助により近き将来に於てその成果を挙ぐべきやう努力可致、何卒御遠慮なく御叱正を賜り度ひたすら御願申候」（『柔道』復刻版第 2 巻 5 号：p.104(傍点原文)）。やや大仰ではあるが親しみやすさを感じさせる文章が誌面に踊り、それまでの『柔道』の持っていた教科書的・啓蒙的な雰囲気とは一線を画している。

第 2 巻 6 号（大正 5(1916)年 6 月発行）には絵と手書き文字で綴る「時事スケッチ」と、稽古の仕方や暑中の過ごし方、上達の秘訣等の、アンケートとそれに対する短い回答で構成されるページが掲載され始める。また、先に掲載されたアンケート記事「柔道家に対する吾人の希望」（『柔道』復刻版第 2 巻 6 号：pp.18-21）に対して寄せられた投書「「柔道家に対する吾人の希望」を読みて吾人の所見を披瀝す」を誌面に掲載し（『柔道』復刻版第 2 巻 8 号：pp.62-63）、寄せられた投書については「読者倶楽部」の欄をやや拡張し掲載するなど、読者が投稿しやすい雰囲気を作り、掲載記事の幅を広く持たせようという姿勢が見られた。この方向性が嘉納によっても評価され、喜ばれていたことは、『柔道』第 3 巻 1 号（大正 6(1917)年 1 月発行）の「編集の最後に」から知ることができる。

> 何かと申す裡に、早や大正六年の新陽を迎へ申候。本誌も之で三つの数え年、そろそろ結いつけ草履のちょこちょこ走り位は出来得べき年と相成り、本当の発達は是れからにて読者諸賢の御後援を仰くべき事も亦是れからにて候。
> かねて申すが如く。本誌は柔道と云ふ技術の単なる研究報告の機関には無之、

嘉納主宰がその高遠なる理想と博大なる識見とを以て自ら主宰せらるゝ『柔道主義に』に（ママ）基く一般向けの青年雑誌に有之候。柔道主義とは心身の健全自在を養成するのみならず。人の世に処して有利有效（ママ）なる生活を営むべき事を主張するイズムに有之候。

即ち本誌は此の主義に基きて、時事を論じ修養を説き、世界的新知識の下に各般の学術技芸を論評紹介すると共に。柔道界は固より一般学生界体育界運動界の研究論評紹介報道に努むるものに有之候。

当新年号は施設未だ十分ならず、是等の所期の一半をも尽し得ざりしも本誌の期する所は以上の如きものにして、漸次その緒につく事と存候。

要するに『上品で面白くって有益な雑誌』と申す事は先づ本誌の特色とも申すべきか、学業に忙はしき学生諸子に取っては多くの雑誌を漁るの必要はあるまじ。唯本誌一部によって諸子の求むる各種の要求を充たすに足るべしと存じ候。

嘗て嘉納主宰、某中学の某校長が近頃の雑誌は生徒に悪いものが多いと訴へたる処、主宰は本誌を示して『処がその嶺外が一つある即ち之れだ。見給へ何処に悪い処があるか』とその校長即ち本誌を閲読して大に喜び、帰来大に之れを学生に勧めたりと、本誌の特色は此の一例を以ても知らるべきに非ずや。

何れにもせよ。編集同人は白熱の意気を以て本誌の改善発展に務むると共に、敢て『何は措いても先ず本誌を読み玉へ』と御勧め致し得る強き自信を有する点を御承知被下度候。

歳更まると共に寒さも更るべし一層の御自愛と御健全を祈り上候。

（『柔道』復刻版第 3 巻 1 号：p.158）

この文章が掲載された『柔道』第 3 巻 1 号（大正 6(1917)年 1 月発行）は、第 1 章で見た通り価格改定と大幅増ページとなった号である。もとより拡大路線であった『柔道』への掲載内容は、ここに至って更に多様になり、「角觝を面白く観る法」（『柔道』復刻版第 3 巻 1 号：pp.113-120)、「力量技術より見たる東西力士の特色（角力鑑賞法の外篇）」（『柔道』復刻版第 3 巻 1 号：pp.121-127)、「冬季休暇の旅行案」（『柔道』復刻版第 3 巻 1 号：pp.68-74）,「冬季旅行便覧」（『柔道』復刻版第 3 巻 1 号：pp.75-78）等の記事が見られる。

「勉強号」と題した『柔道』第 3 巻 3 号（大正 6(1917)年 3 月発行）においては「学校の試験と社会の試験」（『柔道』復刻版第 3 巻 3 号：pp.2-10)、「我輩の学生時代」（『柔道』

復刻版第 3 巻 3 号：pp.23-26）等のテーマに沿った記事を掲載する一方で、やや空白の部分が目立つ小説「腕白少年回想記」（『柔道』復刻版第 3 巻 3 号：pp.134-147）が確認されるため、ページ数を増やそうと苦心していたと考えることができる。

翌号となる第 3 巻 4 号（大正 6(1917)年 4 月発行）には「青年と政治」（『柔道』復刻版第 3 巻 4 号:pp.2-8）、「欧米学生の政治に対する態度」（『柔道』復刻版第 3 巻 4 号:pp.9-15）等の政治をテーマにした記事、翌 5 号では「極東競技大会の予備知識」（『柔道』復刻版第 3 巻 5 号：pp. 104-113）を中心とした競技大会の観戦準備を促す記事をそれぞれ掲載し、翌 6 号では「極東競技大会記録号」と題して、大会とその記録を詳細に紹介する等（『柔道』復刻版第 3 巻 6 号：pp.34-116）、通常の連載記事に特集記事を加えたスタイルがしばらく踏襲された。

第 3 巻 7 号「富岳研究」（大正 6(1917)年 7 月発行）、第 3 巻 8 号「海洋号」（大正 6(1917)年 8 月発行）と続いたが、第一次世界大戦と外交に関する記事を中心とした第 3 巻 9 号（大正 6(1917)年 9 月発行）および簡易生活に関する記事を中心とした第 3 巻 10 号（大正 6(1917)年 10 月発行）において、中表紙の前に以下のスローガンが掲げられた。

> 心身の力を最も有効に使用する道を柔道と云ふ。
> 雑誌『柔道』は此の柔道主義を鼓吹する新時代の評論雑誌である。
>
> （『柔道』復刻版第 4 巻 9 号：目次の直後（傍点原文、ページ番号なし））

第 3 巻 11 号（大正 6(1917)年 11 月発行）においてスローガンは掲示されなくなるものの、誌面には戦時中の食料や海外の記事が見え、また翌 12 号においても軍国主義に関する記事が掲載される等、社会的背景の影響が見られる。

こういった事情からか、誌面と内容が再検討され、再び性格の変更を余儀なくされた様子は、大正 6(1917)年 12 月号の最終ページに掲げられた告知文から窺い知ることが出来る。

> 来年度の本誌！
> 面目また一新！
> 愈柔道界唯一の専門機関！
> 柔道界近時の大発展は、遂に本誌をして、専ら『柔道』に眼を注ぎそが研究機関として報道機関として、唯一無二の権威たらしむべく決定するに至れり。

即ち大正七年の新年号よりは、更に掲載内容を一新し、専ら柔道界時事の評論、報道に努め、形の研究、業の研究、練習法の研究、勝負法の研究、柔道の応用方面の研究、その他新古に亘りて柔道家の伝記人物評論、逸話、苦心談を掲げ、実効の多大にして趣味の豊富なる編集法を採り、現在の修行者読者を利すると共に、後世百年千年の後の参考品研究材料たらしむる事を期すべし。

柔道を学ぶものは勿論、苟も柔道の名を知り柔道を口にするものの、必読雑誌たるべきは、柔道界同人編集同人の深く信じて疑はざる所。乞ふ刮目して来らん年の明け行くを俟たれよ。

（『柔道』復刻版第 4 巻 12 号：p.126）

この掲載後、第 5 巻以降の記事は、詩文評釈や一部の歴史小説を除くと、ほぼ全てが柔道もしくは武道に関わるものとなっている。

これらの具体的な変化を見るため、先に設定したカテゴリに従って記事を分類し、表にまとめ、グラフ化した。

2.　『柔道』の内容分析

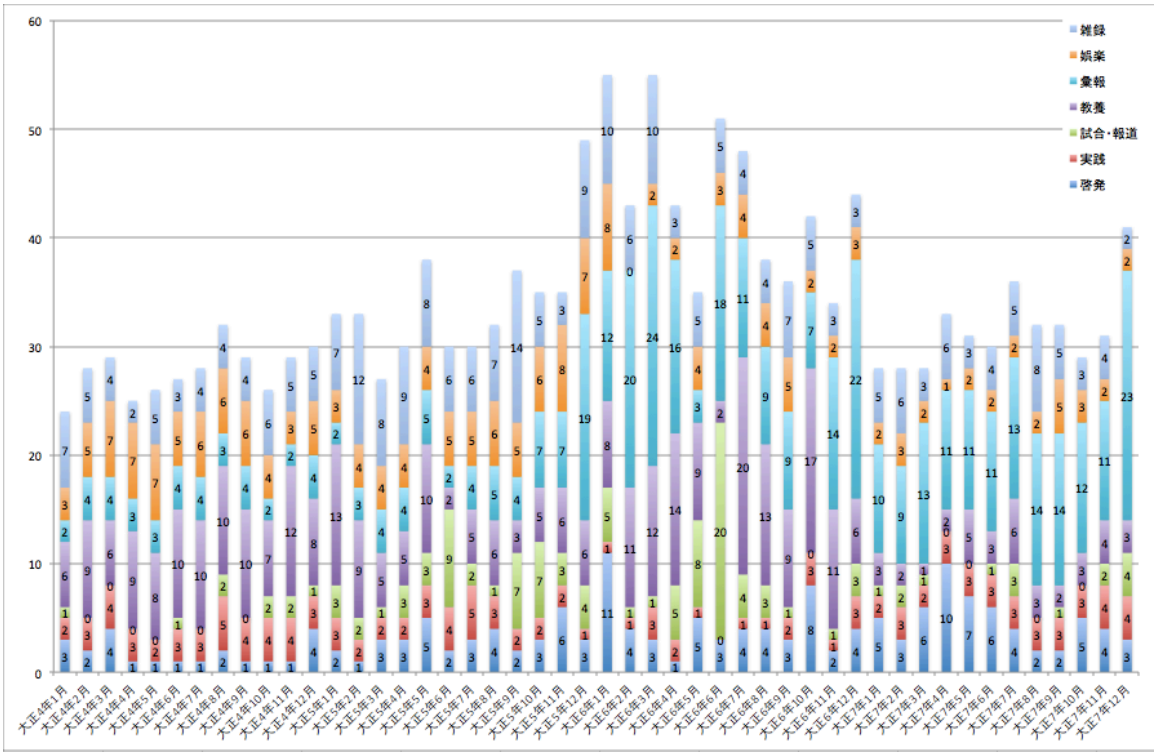

図 7　月間総記事点数比較（メインカテゴリ）

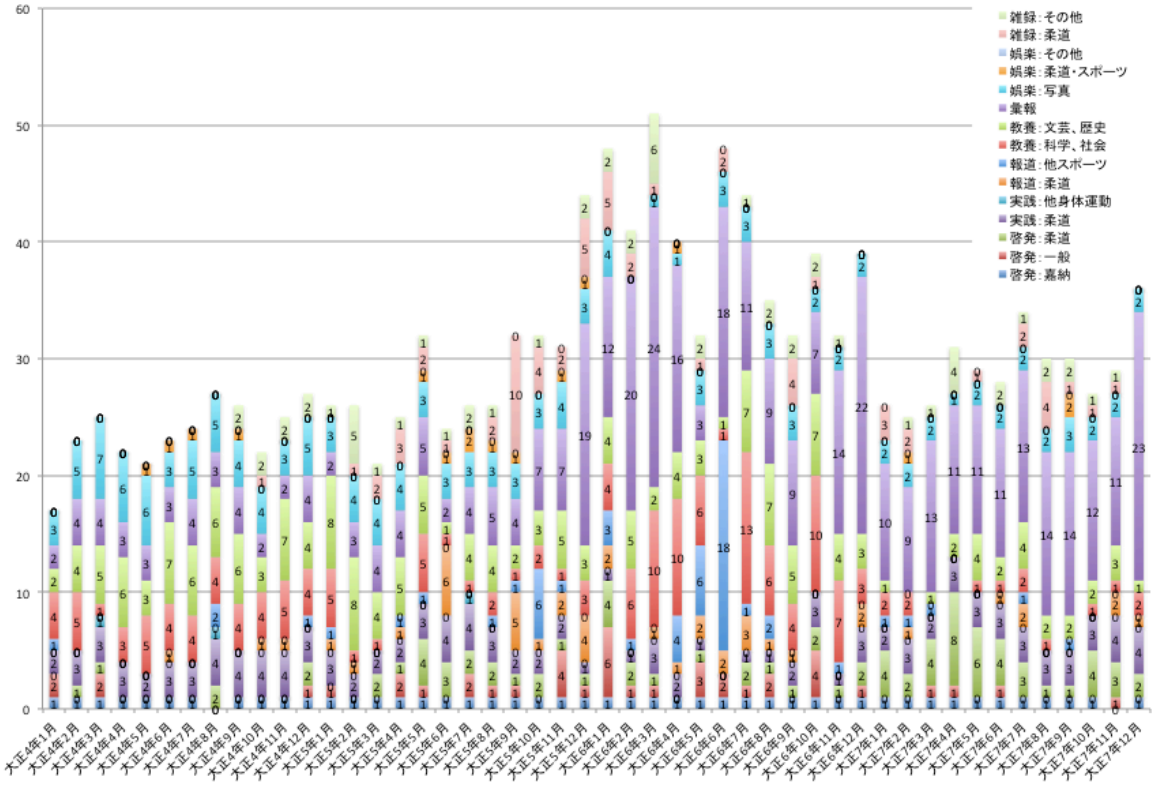

図 8　月間総記事点数比較（サブカテゴリ）

全体を通じて、彙報に分類される記事は点数・ページ数ともに増加している。これらは稽古や大会の様子についての各地方の情報を含み、最終的には誌面全体の 1/3 程度を占めるようになった。

柔道の技術や試合にかかわらない一般的な事柄について、啓発的な論調で書かれた記事は当初多数を占めたものの、のちに減少し、僅かに見られるのみとなった。

教養のカテゴリに該当する記事のうち、科学や社会にまつわる講義的な論調のものは、ページ数が十分に与えられている間は掲載されたが、ページ数の大幅な削減に伴って掲載率が減少した。ただし、掲載される場合には必要なだけのページ数を与えられた。全号を通じてコンスタントに掲載される詩文講釈は、ページ数も大幅な増減は見られなかった。

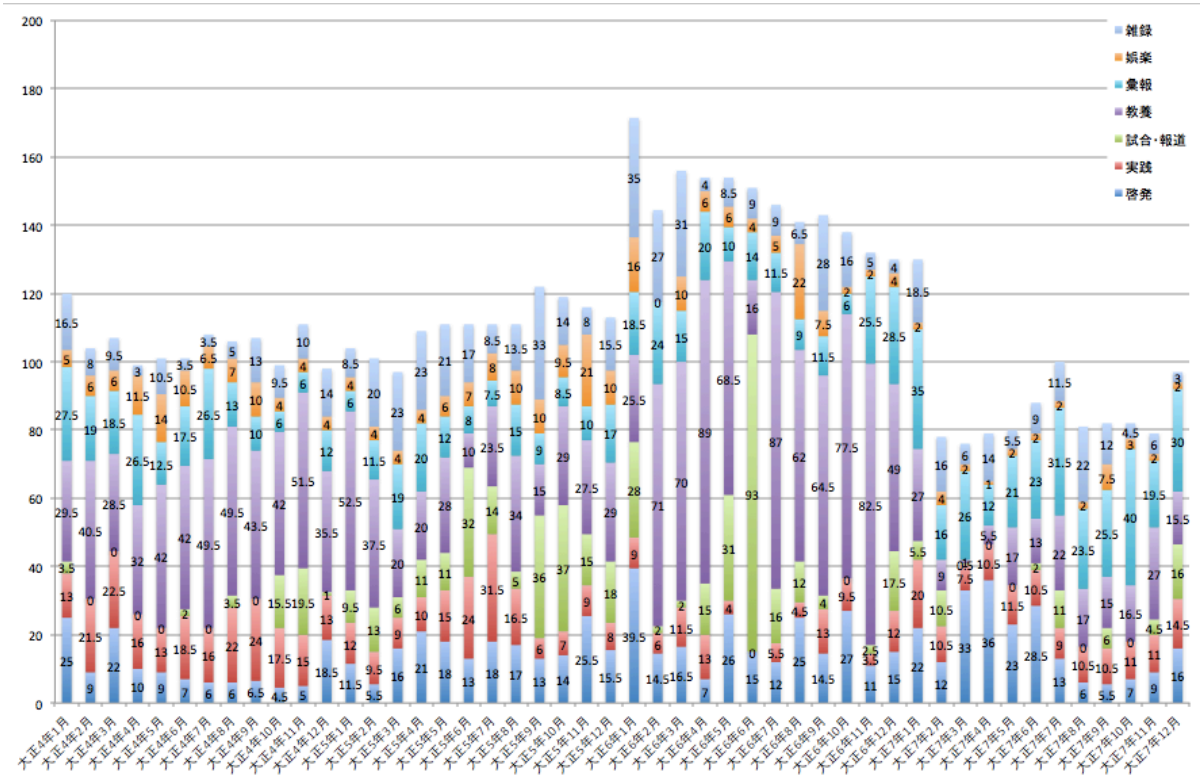

図 9　月間総記事ページ数比較（メインカテゴリ）

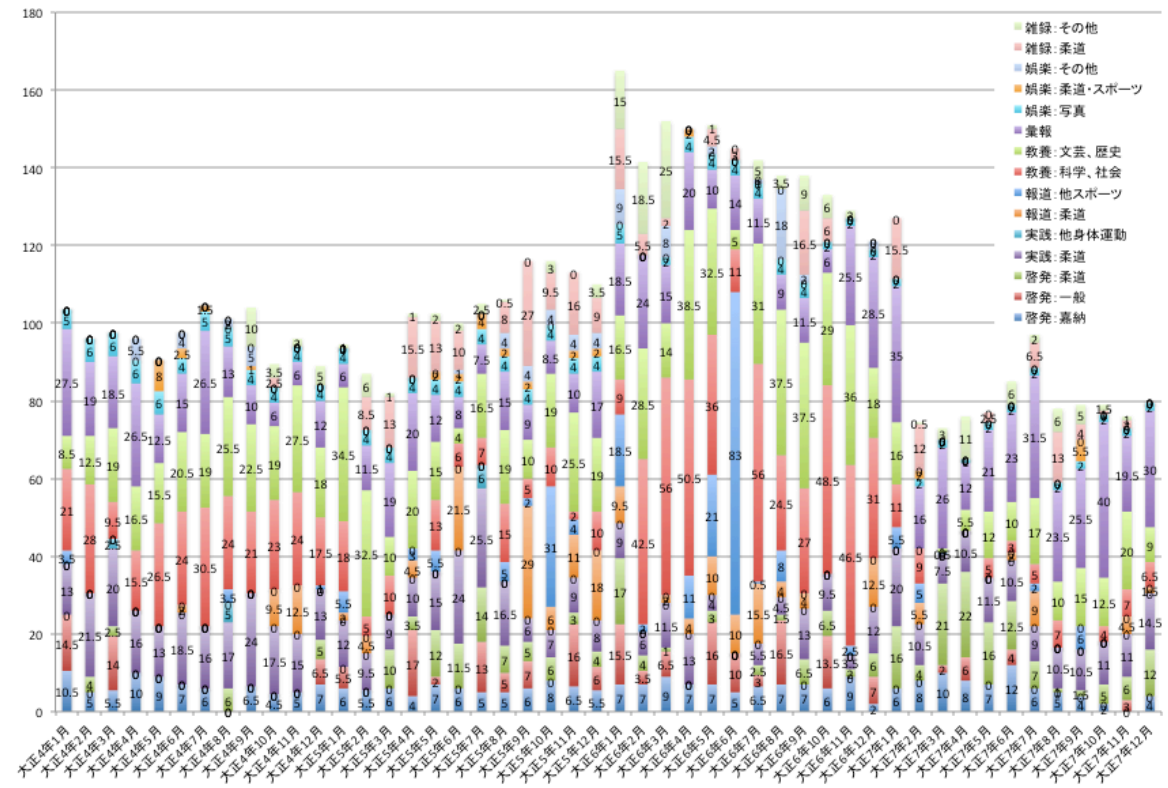

図 10　月間総記事ページ数比較（サブカテゴリ）

『柔道』はページ数もさることながら、記事内容・誌面構成の面で変化が大きく、『国士』と似た誌面構成の第 1 期、編集者を迎え誌面構成が大きく変化した第 2 期、柔道の専門機関誌を標榜し、扱うテーマが柔道に限定された第 3 期と分けられる。第 1 期は大正 4(1915)年 1 月-大正 5(1916)年 3 月、第 2 期は大正 5(1916)年 4 月-大正 6(1917)年 12 月、第 3 期は大正 7(1918)年 1 月-大正 7(1918)年 12 月にそれぞれ該当する。

第 2 期においては目次や書誌情報、各記事見出しが整備され、マンガ的なイラストを含む記事や、講道館指導者陣の日常の小話など、気軽に読める記事が増え、また柔道以外の話題も豊富に提供された。編集者名義で親しげに読者へ呼びかけ、読者からの投稿を募り、投稿されたものを積極的に掲載する等、参加しやすい雰囲気が醸成されていた。こういった読者への歩み寄りは、社会的地位の高い人物による記事が中心であった『国士』の頃には見られない。

試合について報じる記事は第 2 期に最も多く見られ、第 3 期に入っても時折掲載された。柔道の技術に関する記事は継続的に見られるが、執筆者が山下・永岡・村上といった高段者だけでなく、宮川一貫(五段)、高橋数良(五段)と広がっていったことが確認された。

執筆者は社会的地位を伴うものが中心だったが、徐々に柔道の段位を伴うものへと変化した。教養カテゴリの講義的な記事は継続して見られるが、全期間を通じて掲載されているのは詩文評釈のみであり、科学技術や社会について論じたものは、第 3 期には殆ど見られなくなった。

『柔道』において認められた多彩なテーマ、語り口、執筆者による記事は、水谷という編集者によって記事が集められたことに起因する。水谷は総合スポーツ雑誌『運動世界』の初期の主筆編集者でもあり、その経験を活かした誌面構成を行った。特集記事においては水泳や登山といった様々なテーマを扱った他、「角觝を面白く観る法」や「極東競技大会の予備知識」といった「観るスポーツ」に関わるものを執筆した。

第３章　雑誌『柔道』に見る編集者の重要性

1.　雑誌『柔道』の誌面変化のきっかけとなった編集者、水谷竹紫

『柔道』の誌面刷新を担った編集者、水谷竹紫（本名：水谷武）がもともと『運動世界』という雑誌の主筆であったことは前章で述べた通りである。

『運動世界』は野球や端艇、庭球、相撲、柔道、陸上競技等を取り扱う、現代風に言えば総合スポーツ雑誌であり、その創刊号（明治 41(1908)年 4 月発行）から３ヶ月にわたって、山下義韶による「柔道講話」が写真付きで連載されていた。のちに『柔道』誌上で連載される「柔道形解説」が『柔道』第２巻１号（大正 5(1916)年 1 月発行）までは写真を用いていなかったことを鑑みるに、かなり時代を先取りした雑誌であったと考えられる。

『運動世界』において水谷と共に編集を行っていた針重敬喜(1885-1952)は、当時を振り返って以下のように述懐している。

> 水谷君程創造の才に富んだ人は珍らしいと思います、早稲田大学庭球部の生みの親は水谷君です、三田に対して稲門と云う名も水谷君の命名だと記憶して居ます、当時白瀬中尉の南極探検が、資金に困って居る時、早慶の先輩を集めて野球をやった、其時の三田稲門戦と云うのが稲門なる名の生れた最初、それが水谷君の口から出た自然の名だったようです。
>
> 私の思出の第一は明治四十二年に、水谷君が運動世界なる雑誌を出そうと、私を誘われた時です、溜池の黒田侯の門前の角の所に、兄さんの巌さんが印刷所を始められたので、其所でスポーツ雑誌を作ろうと云うので、始めました。資金は元よりの事表紙口絵の意匠体裁から内容に至る迄、全く水谷君一人で、当時としては珍らしい立派なものが出来上り、二年程続いたのでしたが、印刷所がうまく行かなかった上、水谷君は元々此方面で立とうと云うのではなく、演劇の方の研究と仕事を念として居られたようで、アッサリ止めてしまわれました。(……)
>
> （針重, 1936 (水谷編[50], 1936)：pp.13-14）

[50] 水谷の死後、義妹の水谷八重子(1905-1979)によって編まれた小冊子『竹紫記念』は、一周忌と七回忌にそれぞれ上梓されているが、題名が同一である。ここでの針重の述懐は

水谷の葬儀において弔文を読んだことからも、針重と水谷とは懇意であったことが分かるが、針重は大正 10(1921)年当時の武侠世界社の社長であり、のちにサンテル事件と呼ばれるプロレスラー対柔道家の試合を主催した人物である。針重や水谷は早稲田大学の同窓であるばかりでなく、社交団体「天狗倶楽部」の一員であり、未だスポーツという言葉がなく「運動」と呼ばれていた頃から、それらの身体運動の諸々を遊び、楽しみ、また社会に発信していた[51]。

『早稲田大学柔道部百年史』において明治 38(1905)年卒の欄に名前のある三輪吉太郎は、早稲田大学在学当時の様子を以下のように述懐している。

> 竹紫君と云うより僕には武ちゃんと呼んだ方がぴったり来る其れは今から三十年前の早大学生時代に柔道と角力で盛に肉と肉とで揉合いぶつかり合い汗と油から生れた親しみである。
>
> 武ちゃんは余り稽古を励まない（テニス部を一人で背負てその世話をして居たから）然し勝負をやると強かった其当時大角力に源氏山と言う角力取があった。此力士も稽古には余り精を出さぬが本場所になると相当な成績を揚げる武ちゃんは源氏山の様だと僕はよく言うたものだ又其当時都下第一と言われた早大の運動会にも幹部の一人として大にやったものだ。僕と一番重げ重げ会ったのは武ちゃんが運動世界（其当時運動雑誌としては只だ一つのものであった）を経営して居た時僕は柔道記事を頼まれて出しゃばって受持って居たので毎晩毎夜武ちゃんの宅へ尋ねて居た此が一年ばかり続いた。
>
> （三輪, 1936「武ちゃんト僕」水谷編, 1936：pp. 79-80）

水谷は『早稲田大学柔道部百年史』において、明治 39(1906)年卒の欄に筆名が記されているが、『半世紀の早稲田体育』においては、運動部の会議の参加者欄の中に庭球部の代表として本名が記載されている。これについては、校友である泉谷祐勝（明治 39 年卒・野

一周忌に際して寄せられたもので、他の人物による文章も特に断りのない限り一周忌の冊子から引用した。

[51] 針重と講道館との関係性については本研究に直接かかわらないため、ここでは触れないが、直接的にも間接的にも、水谷の交友関係が当時の講道館柔道に与えた影響についても改めて考察したい。

球部）が「当時は特定の競技にのみ専念して活動するのではなく、色々な運動を掛け持ちで行なう学生が多かった」との回想から、いずれも水谷本人と見られる。

泉谷(1952)によると、当時の大学でのスポーツの様子は、「体育局、当時は運動部と言って、柔道部、剣道部、弓術部、庭球部、野球部がその凡てであった。（中略）庭球、野球、端艇部は、部とは名のみで、専門学校が早稲田大学になる準備として、新設した高等予科（大学予科）へ、各地中学から入学した、若い学生同好者の寄り集まりで、中心人物もなく、所謂烏合の衆に過ぎなかった。部長もいなければ、面倒な規約もなく、腕に覚えのある連中が、各部をかけもちで対外試合にも出場していた」という(安井編, 1952 : p.10)。また、「梅、常陸時代、相撲全盛の影響を受け、学生の相撲熱も、中々盛んであった。前田、佐竹両五段、山田、三輪両初段、これに庭球の水谷(竹紫)初段、野球の獅子内初段の猛者達が野球のバックネットの後方に土俵を築き、練習の余暇に稽古を励んでいた」とあり、海外での柔道普及に貢献した人物と水谷との繋がりが示唆されている(安井編, 1952 : p.14)。

水谷の持ち得た豊富な運動体験は、こうした背景から育まれたものであった。

水谷はマネジメントの才能にも恵まれており、早大庭球部のマネージャーの他、島村抱月の劇団「芸術座」の立ち上げに携わり、理事として経営面の才能を発揮した。劇団内の確執により経営から離れるが、のちに島村の死によって解散した芸術座を再興し、各地で興行を行い、義妹の水谷八重子を女優として育てている。また、メディア関連では、『運動世界』での編集経験と、やまと新聞社における劇評および小説の執筆、編集経験を持ち、雑誌『柔道』での編集を担当した後は東京毎日新聞で編集長を勤めている。

当初『国士』の延長線上にあるような誌面構成で始まった『柔道』は、経験豊富な編集者を迎えることによって雑誌としての体裁を整え、社会的な地位を持つ人物による訓話・講義といった性格の強かった記事内容を、多彩なテーマ、語り口、執筆者によって変化させていった。

これが変化し続けることを止め、柔道に特化した内容、スタイルになっていく大正8(1919)年は、編集を担った水谷竹紫（本名：水谷武）が東京毎日新聞に入社した時期と重なっている。その変化は、『運動世界』において、水谷が編集を行っていた刊行当初は幅広いスポーツを対象としていたものが、水谷が離れた後にまず柔道と相撲、端艇に関する記事が姿を消し、のちに庭球や陸上の記事もなくなって野球のみを扱う雑誌となってしまっ

た様子を彷彿とさせる。

水谷はその人脈を活かし、早稲田大学関連の人物を新たな執筆者として『柔道』に招き入れた。水谷が直接呼びかけ、寄稿を依頼したのは、大学の教授陣だけではなく、柔道の稽古でともに汗を流した柔道部員たちであった。そのうちの一人である山崎亘は、水谷の要請に応えて『柔道』に寄稿し、また編集をも手伝っている。山崎の述懐から、水谷が後輩に慕われていたことが窺い知れる。

> 武ウさん、言い慣らされたそして親しみのある武さん、と呼ばして頂いた方が追慕の念深いものがある。
>
> 武さんは実に賑やかな武さんであった、私が早稲田に入ったその年卒業せられたんだが、直ぐ親しく懐かしい武さんになってくれた、柔道もよく稽古して頂いた、ソウソウ、巴投が一番得意で、目まぐるしい程せわしい賑やかな稽古振りであった、道場先輩として色々面倒な世話も焼いて頂いた。
>
> 柔道ばかりじゃない、あの頃佐竹さん等と共に学生角力界の雄であり、亦世話役であった、庭球に端艇に何んでも御座れで、総て運動界の元老格として重きをなした、実に武さんの名は早稲田畑になくてならぬ存在として多くの後輩から親まれた。
>
> 講道館機関紙「柔道」の発刊に当っても、嘉納先生の膝下にあって、相当永く苦難時代の編集に貢献せられた隠れた功労者である、私も其頃一所に御手伝した。
>
> 爾来幾多の辛酸を嘗め、竹紫先生の芸術界への努力精進は実に実に偉大なものがある。
>
> 今や早稲田の誇りであった名物先輩武さんの亡きことは何んとしても淋しい。（中略）アノ賑やかな世話好きな武さんは、今頃佐竹さんと昔を談り合ってることだろうと思うと、仲のよかった御二方共今暫く生かしておきたかったナーと涙新たなものがあって悲しみも亦深い。
>
> （山崎, 1936「先輩武ウさん」水谷編, 1936：pp.59-61）

2.　嘉納と水谷の関係性

一度はスポーツや運動にまつわるメディアの世界から離れた水谷は、嘉納に見出されて雑誌『柔道』の編集を担い、その誌面改革を行った。着任当時、水谷の名義で書かれていた編集後記は、のちに「水谷竹紫氏執筆の柔道家評伝も稿を次いで」という表現が出てくるため、他の人物によって書かれていると考えられ(『柔道』復刻版第 5 巻 2 号：p. 74)、また署名記事が減少していくことからも、『有効乃活動』となった頃にはその編集の任から離れていたと考えられる。

『運動世界』の主筆であった水谷と嘉納の間にどのような繋がりがあったのかを明確に示す史料は確認されていないが、最も可能性が高いのは、大日本体育協会[52]で嘉納と繋がりを持った安部磯雄による紹介であろう。

安部磯雄は早稲田大学野球部の部長にして体育部長という立場であったが、水谷とは庭球を通じての交流があったという。安部は水谷についての心象を以下のように述懐する。

> 私は芸術に縁が遠いので其方面に於ける竹紫君との関係は極めて少ない。二三回芸術座の芝居と、唯一回大隈講堂に於ける八重子さんの舞踊を観た位で、全くお話にならない。
>
> 然し私は早大の運動部に可なり深い関係を有って居たので竹紫君とは常に接触を保ったのである。竹紫君は柔道部の選手であり、同時に庭球にも興味をもって居た。私も幼年時代には父が柔道の師範であったため、六七歳の頃から道場に出入し、後米国に留学してからは三年間庭球のみに熱中したのであるから、体育の方面に於ては竹紫君と共通する点が多かった。
>
> 健全なる身体を有する人は概して快活であるが、竹紫君は最も多く此原則を実証した人ではないかと思う。私は今でも竹紫君の恵比須顔を思い浮かべることが出来る。会話が十分も継続すると二三回は必ず哄笑する。これが実に君の

---

[52] 大日本体育協会は明治 44(1911)年 7 月に嘉納の提案によって創設されたが、この創設にあたって嘉納は学校方面に協力を求め、「当時の帝国大学総長浜尾新、早稲田大学々長高田早苗、慶應義塾々長鎌田栄吉の諸氏に呼びかけ」、この結果として、「帝国大学から書記官中村恭平、早稲田大学から運動部々長安部磯雄、高等師範学校から体育部主任永井道明および可児徳ら」が集まり、数回の会合を経て創設に至っている（嘉納先生伝記編纂会, 1964：pp.592-594)。

特徴であった。こんな快活な楽天的な、而も鋼鉄のような身体の持主がどうして早く此世を去ったのであろう。竹紫君の悲報を聴いた瞬間これが私の感想であった。

（安部, 1936「運動家としての竹紫君」水谷編, 1936：pp. 96-97）

ここで言われる水谷の快活さを、我々は『柔道』の編集後記に見ることができる。読者に対する呼びかけはまさに、水谷の人となりによってなされたものだったのである。

学生時代の水谷の様子は、同窓である鈴木堅三郎の記事にも書かれており、同窓生から慕われていた様子が窺い知れる。

水谷君を僕が初めて知ったのは今から三十何年か前で早大の学生時代だ、僕が十九か二十位だったから水谷君も二十三四歳の若僧であったのだが如何にも大人じみて居て兄貴と云うよりもお耶父の様な感じがして居た、安部先生に対する話しぶりなどを側で聞いて居ると大人と大人、先生とお耶父とが話をして居る様な気がして居た事が今尚深く印象つけられて居る、それで居て非常に親しみ易い人で僕などは学校を出てから後も大阪から時折上京した時など水谷君が神楽坂で化粧品屋をやって居た時分で夜中に何時も叩き起して宿り込んだものだ。（中略）

水谷君は学生時代には柔道角力ボートテニスの各部に関係して居ったがテニス部幹事が言わば本職であった。テニスは上手ではなかったので選手の資格はなかったがアンパイヤーとして相当幅をきかして居た、早慶戦にアンパイヤーをやってイン、アウト、で物言いが付いた時に「あの球は出る可き性質の球だ」と云う論法で片付けた事などを記憶して居る。

当時は交戦両校からアンパイヤーを出したもので味方を合法的に有利に審理するのが名アンパイヤーであった。この意味に於て水谷君は確に名アンパイヤーであった。兎に角早大庭球界の恩人と言い得る人だ。

（鈴木, 1936「水谷君の思い出」水谷編, 1936：pp. 91-92）

水谷は『柔道』においても複数の署名記事を継続的に執筆し、人物伝や小説の他、大会の報道記事や特集ページなど、様々な記事を掲載した。『柔道』が『運動世界』と異なるの

は、新たに書き手となった柔道家たちが稿を次ぎ、編集者にして書き手である水谷がその編集の任から離れた後にも、筆を折ることなく書き続け、一度なくなった娯楽的な記事「茶咄」を模した記事「ゴシツプ」を掲載するなど、過去の誌面の多様性を担保しながら雑誌を刊行し続けたという点にある。新たな書き手を増やし、また様々な語り口を持たせるという意味で、水谷が行った『柔道』のメディアとしての改革は成功したと言えるだろう。

柔道家としての水谷の最終段位は二段、出身となる早稲田大学の柔道部史においても殆ど注目されていないが、その死に際して嘉納は、昭和期の雑誌『柔道』において「送・迎・弔」と題する文章を発表した。

逓信大臣床次竹二郎、田中鉱業株式会社々長田中銀之助、大参考等学校長溝渕進馬、五段羽鳥四郎、六段大野秀道と共に、「講道館創立当時の有段者であって、創立当初の功労者」として小田勝太郎の、「雑誌の編集者として、講道館の事業に貢献した人」として水谷武の名を挙げ、「上記七氏は何れも講道館の関係者として縁故深き人々であったが、最近相次いで物故せられた。予は会員と共に深く其の長逝を悼み、遺族に対して深厚の弔意を表するものである」と結んでいる(嘉納, 1935)。

「本年の八月及び九月はわが講道館の人事方面に於ける哀みの月であった」。

発行部数の面で奮わない『柔道』の編集に際して水谷が行った数々の努力と改革を、嘉納は評価していた。その誌面の改革が柔道界の語り手に与えた影響についても、嘉納は理解し、また評価していたのではないだろうか。

第４章　結論

本研究の最初に掲げた目的は、柔道普及に果たした雑誌メディアの役割について、明治・大正期の柔道関係雑誌群の内容分析を通じた歴史的な考察を行うことであった。それにあたり、初期の雑誌群『国士』『柔道』『有効乃活動』における誌面の変遷と、それによって起こった執筆者および記事内容・語り口の変化を対象として、３つの課題が設定された。

この課題は、それぞれ第１章、第２章、第３章に該当する。

第１章においては、初期の雑誌群『国士』『柔道』『有効乃活動』のページ数および価格の推移を明らかにした。その結果、定価が設定されていない『国士』を除いた『柔道』『有効乃活動』いずれも刊行期間のうち比較的早い時期に価格が改定されていることが明らかとなった。ページ数も同様に、誌名の変化とは別のタイミングで大きく変化が見られ、変化する際には読者に対して告知の文章が掲載されていた。

発刊の趣旨に見られる個々の雑誌の役割は、『国士』『柔道』においては共通しており、青年修養誌として訓育を施す、というものであった。また、『有効乃活動』への改題の際に標榜される役割が「青年修養誌」から「柔道の専門機関誌」へと変化しているが、誌面に変化が現れたのは『柔道』第４巻９号（大正 7(1918)年９月発行）においてであり、この段階で「柔道」と「有効乃活動」が同じものを示しているということが強調され、改題はそれをさらに印象付けるという効果を持っていたことが推察される。

第 2 章においては、特に『柔道』において行われた雑誌としての体裁の模索・安定と、記事内容・誌面構成・ページ数の変化と、執筆者の変化について明らかにした。

『柔道』は記事内容・誌面構成の面で変化が大きく、『国士』と似た誌面構成の第１期、編集者を迎え誌面構成が大きく変化した第２期、柔道の専門機関誌を標榜し、扱うテーマが柔道に限定された第３期と分けられる。

特に第２期においては、表紙や誌面の改変、コーナーの新設によって雑誌としての様々な可能性が模索された。また、編集者から読者に対して親しみある呼びかけが行われ、それまでは師弟に近い状態で分かたれていた発信者と受信者とを架橋した。記事内容の面においても、マンガ的なイラストを多く含んだ記事や、それまで明らかにされてこなかった講道館指導者陣の日常の小話、また読者からの投書を掲載したということから、『国士』や

初期の『柔道』における訓育・啓蒙・講義的な記事群とは異なる、気軽に読める記事を増やしたことが確認され、第 3 期になっても記事の語り口の面で多様性が見られた。

柔道の技術については、以前から執筆していた山下・永岡・村上だけでなく高橋等を新たな語り手として迎え、記事の執筆が見られるようになった。また、観覧記等も寄せられ、見るスポーツとしての柔道と、その表現の萌芽をここに見ることができた。

第 3 章においては、雑誌『柔道』の誌面の変化をもたらした編集者・水谷竹紫に着目し、水谷自身の経歴および交友関係と『柔道』の執筆者の変化を関連付けて考察した。

水谷は学生時代を通じた多種多様なスポーツの経験と、それに連なる人脈を持ち、誌面の構成・編集だけでなく執筆者としても活躍し、『柔道』の誌面の変化やページ数の増加を数量的な面でも支え、新たな執筆者と、記事の語り口の多様性を齎した。

当初、指導者によって発刊され、啓蒙雑誌という性格が強かった講道館雑誌群は、社会的な地位や柔道の指導者という肩書きを持たない編集者を迎えることによって、様々な執筆者による意見の発信を可能にした。

発表の場としての機能を強調して見せることで、読者を活性化し、書き手を育てたと考えられる。地方の修行者からの寄稿が、彙報の一部としてではなく単独の記事として掲載され、意見交換が行われたことにも、この効果が見出される。

『柔道』において見られた発信者から受信者への歩み寄りは、この両者の関係性が、多くの武道で見られる上下関係とは異なるということを示し、言論活動を自由に、また活発にしたと考えられる。

このような語り手の養成は、後に柔道が語られていく際の下支えとなったと考えられる。柔道に関連して様々なことを語り得る、また様々な表現手段を用い得るということを示し、それを行っていくことは、広義の柔道の実践とも言えるのではないだろうか。

謝辞

論文執筆にあたって多くの先生方、先輩方、ゼミの皆様にお世話になりました。ご期待に添うものが書けず、猛省の至りです。ご恩を仇で返すことのないよう、今後の精進をもって御礼に代えさせて頂きます。ありがとうございました。

第５章　文献・資料

1.　文献

井上俊(1992) 「武道」の発明—嘉納治五郎と講道館柔道を中心に．ソシオロジ, 37(2)：pp.112-125

井上俊(2004) 武道の誕生．吉川弘文館：東京, pp.46-54

老松信一(1955) 柔道五十年．時事通信社：東京, pp.70-72

小田切毅一(2002) 明治の異文化体験から遡る江戸伝来の「運動する身体」．体育史研究 19：pp.59-64

大滝忠夫編(1972) 嘉納治五郎 私の生涯と柔道．新人物往来社：東京

嘉納治五郎(1889) 柔道一班并ニ其教育上ノ価値(渡部一郎編(1971) 史料明治武道史 所蔵)．新人物往来社：東京, pp.81-97

嘉納治五郎(1898) 造士会創立の趣旨．国士(復刻版), 1(1)：pp.3-4

嘉納治五郎(1914) 「柔道会」創設の趣旨．柔道(復刻版), 1(1)：pp.1-2

嘉納治五郎(1914) 柔道会規則．柔道(復刻版), 1(1)：pp.3-4

嘉納治五郎(1922) 柔道会の会員諸君へ．有効乃活動(復刻版), 8(3)：pp.53-54

嘉納治五郎(1922) 講道館文化会規則．有効乃活動(復刻版), 8(3)：pp.54-55

嘉納治五郎(1927) 嘉納塾について(大滝忠夫編(1972) 嘉納治五郎 私の生涯と柔道 所蔵)．新人物往来社：東京, pp.66-70

嘉納治五郎(1997) 嘉納治五郎 私の生涯と柔道．日本図書センター：東京

嘉納先生伝記編纂会(1964) 嘉納治五郎．布井書房：大阪, pp.115-140；pp165-189

菊幸一(1993) 「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学 日本プロ野球の成立を中心に．不昧堂出版：東京

菊幸一編著(2014) 現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか オリンピック・体育・柔道の新たなビジョン．ミネルヴァ書房：京都

岸野雄三ほか(1986) 新版 近代体育スポーツ年表．大修館書店：東京

工藤雷介(1965) 柔道名鑑．柔道名鑑刊行会：東京

『講道館百三十年沿革史』編纂委員会(2012) 講道館百三十年沿革史．講道館：東京, pp.150-171

櫻井寅之助(1911) 化学教科書 師範教育. 宝文館:東京(国立国会図書館 近代デジタルライブラリー所蔵)
櫻井寅之助(1918) 野鳥語 欧米土産. 宝文館:東京(国立国会図書館 近代デジタルライブラリー所蔵)
真田久(2014) 嘉納治五郎の考えた国民体育(菊幸一編著(2014) 現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか オリンピック・体育・柔道の新たなビジョン) . ミネルヴァ書房：京都：pp.83-106
志々田文明・小野沢弘史(1997) 大正期の早稲田柔道について 早稲田大学柔道部の歴史的研究. 武道学研究, 30(Supplement)：p.42
鈴木康史(1997) 経験・言語・宣伝 思想史からの嘉納治五郎. 体育思想研究, 1：pp.17-40
生誕 150 周年記念出版委員会編(2011) 気概と行動の教育者 嘉納治五郎. 筑波大学出版会：茨城
寒川恒夫(1984) 柔道の歴史的考察(竹内善徳ほか編著(1984) 論説 柔道). 不昧堂出版：東京, pp.37-45
寒川恒夫(2014) 日本武道と東洋思想. 平凡社：東京, pp.282-328
高津勝(1994) 日本近代スポーツ史の底流. 創文企画：東京,
藤堂良明(2007) 柔道の歴史と文化. 誠信社：東京
友添秀則(2001) 武道論 嘉納治五郎の柔道とは何だったのか（杉本厚夫編 体育教育を学ぶ人のために）. 世界思想社：京都, pp.224-244
永木耕介(1999) 嘉納治五郎の柔道観の力点と構造 言説分析によるアプローチから. 武道学研究, 32(1)：pp.42-69
永木耕介(2008) 嘉納柔道思想の継承と変容. 風間書房：東京
林健太郎(1970) 史学概論(新版). 有斐閣：東京, p.13；pp.15-19；pp.24-27
東憲一(2011) 嘉納治五郎の啓蒙雑誌「国士」. 東京外国語大学論集, 第 83 号：pp.353-362
東憲一(2012) 嘉納治五郎の啓蒙雑誌の変遷. 東京外国語大学論集, 第 84 号：pp.313-324
バーナード・ベレルソン著 稲葉三千男・金圭煥訳(1957) 内容分析(社会心理学講座 VII 大衆とマス・コミュニケーション(3) 所蔵）. みすず書房：東京
松本芳三(1975) 柔道のコーチング. 大修館書店：東京
丸島隆雄(2006) 講道館柔道対プロレス初対決 大正十年・サンテル事件. 島津書房：東京, pp.20-24

丸屋武士(2014) 嘉納治五郎と安部磯雄 近代スポーツと教育の先駆者. 明石書店：東京

丸山三造(1939) 大日本柔道史. 講道館：東京, pp.194-195

丸山三造(1942)日本柔道史. 大東出版社：東京

水谷八重子(1936) 竹紫記念. 水谷八重子：東京

水谷八重子(1941) 竹紫記念. 水谷八重子：東京

水谷八重子(1997) 水谷八重子 女優一代. 日本図書センター：東京

村田直樹(2001) 嘉納治五郎先生に学ぶ. 日本武道館：東京

安井俊雄編(1952) 半世紀の早稲田体育. 早稲田大学体育局：東京

「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会(1997) 早稲田大学柔道部百年史. 早稲田大学柔道部・早稲田柔道クラブ：東京

2.　参考資料

①　『講道館百三十年沿革史』掲載の「編集兼発行者・発行所・頁・定価の変遷」

誌名	発行者兼編集者	発行所	頁	定価
国士 M31.10-M36.12	富田常次郎	造士会	55	年会費で支払
柔道 T4.1-T7.12	小田勝太郎	柔道会本部	108	15 銭
有効乃活動 T8.1-T11.3	小田勝太郎	柔道会本部	102	30 銭
柔道界 T11.4-T11.9	野村寛一	講道館文化会	18	12 銭
大勢 T11.4-T11.8	野村寛一	講道館文化会	162	50 銭 会員に限り 45 銭
柔道 T11.10-T12.12	野村寛一	講道館文化会	66	30 銭
作興 T13.1-S13.1	野村寛一	講道館文化会	92	30 銭
柔道 S5.4-S20.1	野村寛一	講道館文化会	40	20 銭
※S20.3-S21.5 まで休刊。ただし、S20.2 は刊行されているようだが現存していない。				
柔道 S21.6-S22.8	下重仙吉	講道館	32	12 円
柔道 S22.9-S23.5	宮崎敏	講道館	32	15 円
柔道 S23.6-H 元.12	松本芳三	講道館	32	20 円
柔道 H2.1-H9.12	川村禎三	講道館	108	450 円
柔道 H10.1-H20.3	手塚政孝	講道館	120	560 円
柔道 H20.4-H24.3	中村良三	講道館	132	560 円

②　『作興』に掲載された「雑誌の発行」および「『柔道会』創立の趣旨」再録

雑誌の発行

講道館創立以来、道場において、時々、講義または訓話を行なっている。ある時は柔道のわざの原理をとき、実際の方を示し、或る時は柔道の本義をとき、講道館員として、また、人間としての処世の要道を話すことにしている。或る時代は、時をきめて継続的にこれを実行したこともある。或る時は門下における先進者をして師範に代わって同様のことをなさしめたこともある。

自分が海外旅行によりて久しく道場に出席のできぬ場合、または日本におっても、頻繁に、東京以外に出ておる時は、久しく中絶したこともあるが、この講義または訓話について、ひとつはなはだ困難を感じていることがある。それは講道館道場の聴講者の実際から見ると、継続的に出席するものはむしろ少数で、その大多数は絶えず人が変わっておるということである。日々引き続きて出るものは、館内に起居するものと、附近在住の少数のものにとどまるので、多数の聴講者は、平素各その出席する道場に出席していて、毎々本部にこられない。しかし、講道館本部の道場には、高段者も多数出席していて、実力ある修行者が多く集まってくるから、柔道修行者は、時々この本部で練習をしなければいかぬ。ことに、或る程度まで進んだものは、自分をみがくためにぜひその必要があるのである。けれども、都下の修行者は、広き範囲の各所に教わっており、また、平素各自の修行場所があるから、時々よりほかに、本館の道場に出席が出来ないという状勢で、この講義訓話の定日をきめても、普通の学校のように、つねに同じ顔がそろうようにはいかない。そこで、順序をたてて、継続して話をしても、これをきく方が、時々とぎれてその話をきくということになる。それに、絶えず新しい入門者もあるから、継続的の話となると、その始をきかない彼等には、途中からでは理解しがたいことがある。

さればといって、初心者に話すことを毎々繰り返せば、古いものにはさほど役には立たず、こうして、初心者と相当の修行をつんだものと混合して道場に出席しているときに、むずかしいことは初心者にわからず、初心者に適当なるは、古いものにはつまらない。まことに困難を感ずるのである。ともかくも、こうして道場で自分も話し、門下の先進者に話さしめることは必要なことであるが、道場における講義・訓話ばかりでは、一局部に偏して、ひろく教育を普及させることはむずかしい。これは、多年の経験から見ても、どうしても、雑誌をだす必要がある。ことに、おいおい多数の修行者が、非常にひろく地方に散在しているのであるから、これら多数のもののためには、一層その必要を感ずるのである。

明治三十一年の頃に、これは柔道のみを目的としたのではなかったが、一般青年の修養の資とするために「国士」という雑誌を発行したことがある。この雑誌は、都合によって三十六年から休刊したが、そののち、講道館柔道の修行者を主として、さらに他方面にも修養の資料となるべき雑誌を発行したならば、これによりて継続的に、秩序的に、柔道に関する自分の考えを示すことができる。さらにこの仕事に加えて、適当なる機会を利用して、講道館において話をしたならば、やや教育が行きわたるであろうという考えから、大

正三年十二月に、柔道会というものを起こして、次のごとき趣旨を発表した。

「柔道会」創立の趣旨

我が国泰西の文明を輸入するや、制度文物範を彼に取り更革する所多く、其の文化の上に裨補したる効果甚大なりと雖、為に我が国民思想に動揺を来したること亦少からず。加之近年富の増殖に伴ひ奢侈遊惰の風日を逐ひて益々甚しからんとす。是れ国を愛する人士の等しく憂慮する所にして、又其の矯正に最も心力を注ぐ所たり。予が柔道に於けるも亦実に此の間に尽す所あらんことを期せしに外ならず。予は明治十五年講道館を創設し柔道を唱道せしより茲に三十有余年、常に世の弊風と対抗し、国民の身体を鍛錬し、士気を鼓舞し徳操を涵養し、国民思想を統一維持せんことを務めたり。幸に国運の隆昌と共に斯の道益々発達し、今や我が国粋の一として遍く海内に行はるゝのみならず、延いて遠く海外に及べるもの、門下諸氏が努力翼賛の結果たるは論を待たずと雖、亦柔道その者に能く今日あるを致すべき素質あるに困らずんばあらず。

今日各地に在りて柔道を教ふる者実に千を以て数ふべく、各々其の指導の任に当り鞠躬及ばざらんことを之れ恐る、其の熱誠賞歎するに余あり。但久しく地方に在りて斯道の進歩に伴ふこと能はざるを憾むるものあり、又修行半途にして出でて教職に就きし者少なからず。是を以て或は適当の方法を以て更に指導を得んことを希望し、或は予の自ら巡遊して地方の子弟を直接指導するあらんことを要請して止まず。更に斯道に志し修行の途を求るも適当なる師を得ること能はざる者、亦幾十万なるを知らず。然れども予自ら全国を巡歴して直接指導するが如き、一一書信に応答して其の要望を満足せしむるが如き、又適当の教員を到る処に派遣して全国の志望者を指導するが如き、皆俄に行き得べきことに非ず。是に於て予は、柔道を中心とせる一団体を組織し、適当の機関を設けて講道館と内外相応じ、以て柔道の本旨を発揮すると同時に、益々斯道の発達普及を図らんと欲し、茲に柔道会を興すことゝせり。

柔道会は、此の目的を貫徹せんが為、雑誌及図書を発行し、講演会及講習会を開き、諸方に視察員を派遣し、以て柔道の本義を闡明し、適当なる修行の方法を授け、人として今日の世に処する道を知らしめ、柔道の主旨に基づける学術上及修養上の説話を為し、会員の知見を弘め、思想を高めんことを期す。蓋し柔道会は時運の趨勢に鑑み必要に応じて興りたるものにして、柔道をして啻に外形上のみならず精神的に発達普及せしめ、依って以て優秀健全なる国民を作らんとするに外ならず。希はくは大方の諸君本会の趣旨を諒し、

別掲の規則に準じ、奮って入会又は賛成せられんことを。

大正三年十二月　　嘉納治五郎

（「柔道会規則」省略）

そこでいよいよ大正四年一月から雑誌「柔道」を発行したのである。

（嘉納,1927(大滝編, 1972)：pp.138-146）

③　『国士』号別ページ数一覧

『国士』については本文、講道館記事のページが別々に振られているため、併記した。造士会の創立趣旨や会則、「大日本遊泳術」等の付録に該当するものについては「付録」の欄を設け、そこに記載した。

発行年月	巻号数	本文	講道館記事	付録	総ページ数	口絵ページ数
1898 年 10 月号	1 巻 1 号	52	3	6	61	0
1898 年 11 月号	1 巻 2 号	78	6	0	84	1
1898 年 12 月号	1 巻 3 号	78	10	0	88	1
1899 年 1 月号	1 巻 4 号	80	12	0	92	4
1899 年 2 月号	1 巻 5 号	72	6	0	78	2
1899 年 3 月号	1 巻 6 号	84	9	0	93	0
1899 年 4 月号	2 巻 7 号	70	8	0	78	1
1899 年 5 月号	2 巻 8 号	74	2	0	76	3
1899 年 6 月号	2 巻 9 号	52	6	0	58	0
1899 年 7 月号	2 巻 10 号	36	8	0	44	0
1899 年 8 月号	2 巻 11 号	42	4	0	46	0
1899 年 9 月号	2 巻 12 号	36	2	188	226	0

1899年10月号	3巻13号	76	2	0	78	1
1899年11月号	3巻14号	74	10	0	84	0
1899年12月号	3巻15号	78	2	0	80	0
1900年1月号	3巻16号	78	0	0	78	3
1900年2月号	3巻17号	76	6	0	82	1
1900年3月号	3巻18号	78	0	0	78	1
1900年4月号	3巻19号	80	0	0	80	1
1900年5月号	3巻20号	72	8	0	80	1
1900年6月号	3巻21号	74	6	0	80	1
1900年7月号	3巻22号	77	3	0	80	1
1900年8月号	3巻23号	68	12	0	80	3
1900年9月号	3巻24号	72	8	0	80	2
1900年10月号	4巻25号	68	12	0	80	1
1900年11月号	4巻26号	70	10	0	80	1
1900年12月号	4巻27号	72	8	0	80	0
1901年1月号	4巻28号	62	8	10	80	3
1901年2月号	4巻29号	76	4	0	80	1
1901年3月号	4巻30号	72	8	0	80	1
1901年4月号	4巻31号	76	4	0	80	1
1901年5月号	4巻32号	72	8	0	80	1
1901年6月号	4巻33号	76	4	0	80	1
1901年7月号	4巻34号	80	0	0	80	1
1901年8月号	4巻35号	80	0	0	80	1
1901年9月号	4巻36号	72	8	0	80	3
1901年10月号	5巻37号	80	0	0	80	1
1901年11月号	5巻38号	72	8	0	80	0
1901年12月号	5巻39号	72	8	0	80	2
1902年1月号	5巻40号	58	10	12	80	4
1902年2月号	5巻41号	58	2	20	80	1

1902年3月号	5巻42号	70	8	2	80	0
1902年4月号	5巻43号	80	0	0	80	1
1902年5月号	5巻44号	80	0	0	80	2
1902年6月号	5巻45号	76	3	0	79	1
1902年7月号	5巻46号	80	0	0	80	1
1902年8月号	5巻47号	80	0	0	80	1
1902年9月号	5巻48号	78	1	0	79	0
1902年10月号	6巻49号	80	0	0	80	3
1902年11月号	6巻50号	80	0	0	80	2
1902年12月号	6巻51号	62	7	0	69	1
1903年1月号	6巻52号	62	8	10	80	2
1903年2月号	6巻53号	68	0	0	68	1
1903年3月号	6巻54号	62	6	0	68	2
1903年4月号	6巻55号	66	1	0	67	1
1903年5月号	6巻56号	70	0	0	70	2
1903年6月号	6巻57号	60	0	0	60	0
1903年7月号	6巻58号	56	3	0	59	1
1903年8月号	6巻59号	62	0	0	62	0
1903年9月号	6巻60号	63	1	0	64	1
1903年10月号	6巻61号	69	0	0	69	1
1903年11月号	6巻62号	72	0	0	72	1
1903年12月号	6巻63号	72	0	0	72	1
1898～1903年	63冊分平均	70.2	4.3	4.0	78.4	1.2

表 5　『国士』号別ページ数一覧

④　『柔道』月間記事点数サブカテゴリ別の表

発行年数	大正4												大正5											
発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
啓蒙:嘉納	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
啓蒙:一般	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	1	0	2	1	1	0	4	1
啓蒙:柔道	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	2	1	4	3	2	2	1	2	1	1
実践:柔道	2	3	3	3	2	3	3	4	4	4	4	3	3	2	2	2	3	4	4	3	2	2	2	1
実践:他身体運動	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
報道:柔道	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	6	0	0	5	1	2	4
報道:他スポーツ	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	1	1	6	1	0
教養:科学、社会	4	5	1	3	5	4	4	4	4	4	5	4	5	1	1	0	5	1	1	2	1	2	1	3
教養:文芸、歴史	2	4	5	6	3	7	6	6	6	3	7	4	8	8	4	5	5	1	4	4	2	3	5	3
彙報	2	4	4	3	3	3	4	3	4	2	2	4	2	3	4	4	5	2	4	5	4	7	7	19
娯楽:写真	3	5	7	6	6	3	5	5	4	4	3	5	3	4	4	4	3	3	3	3	3	3	4	3
娯楽:柔道・スポーツ	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	0	1	1
娯楽:その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
雑録:柔道	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	3	2	1	0	2	10	4	2	5
雑録:その他	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	1	5	1	1	1	1	2	1	0	1	0	2
総記事点数	17	23	25	22	21	23	24	27	26	22	25	27	26	26	21	25	32	24	26	26	32	32	31	44

表 6　月間記事点数サブカテゴリ別(1)

発行年数	大正6												大正7											
発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
啓蒙:嘉納	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1
啓蒙:一般	6	1	1	0	3	2	1	2	0	4	0	1	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0
啓蒙:柔道	4	2	1	0	1	0	2	1	1	2	1	2	4	2	4	8	6	4	3	1	1	4	3	2
実践:柔道	1	1	3	2	1	0	1	1	2	3	1	3	2	3	2	3	3	3	3	3	3	3	4	4
実践:他身体運動	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
報道:柔道	2	0	1	1	2	2	3	1	1	0	0	2	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	2	1
報道:他スポーツ	3	1	0	4	6	18	1	2	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
教養:科学、社会	4	6	10	10	6	1	13	6	4	10	7	3	2	2	0	0	1	1	2	1	0	1	1	2
教養:文芸、歴史	4	5	2	4	3	1	7	7	5	7	4	3	1	0	1	2	4	2	4	2	2	2	3	1
彙報	12	20	24	16	3	18	11	9	9	7	14	22	10	9	13	11	11	11	13	14	14	12	11	23
娯楽:写真	4	0	1	1	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	3	2	2	2
娯楽:柔道・スポーツ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
娯楽:その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
雑録:柔道	5	2	1	0	1	2	0	0	4	1	0	0	3	2	0	0	1	0	2	4	1	1	1	0
雑録:その他	2	2	6	0	2	0	1	2	2	2	1	0	0	1	1	4	0	2	1	2	2	1	1	0
総記事点数	48	41	51	40	32	48	44	35	32	39	32	39	26	25	26	31	29	28	34	30	30	27	29	36

表 7 月間記事点数サブカテゴリ別(2)

⑤　『柔道』月間記事ページ数サブカテゴリ別の表

発行年数	大正4												大正5											
発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
啓蒙:嘉納	11	5	5.5	10	9	7	6	0	6.5	4.5	5	7	6	5.5	6	4	7	6	5	5	6	8	6.5	5.5
啓蒙:一般	15	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	6.5	5.5	0	0	17	2	0	13	5	7	0	16	6
啓蒙:柔道	0	4	2.5	0	0	0	0	6	0	0	0	5	0	0	10	3.5	12	12	14	7	5	6	3	4
実践:柔道	13	22	20	16	13	19	16	17	24	18	15	13	12	9.5	9	10	15	24	26	17	6	7	9	8
実践:他身体運動	0	0	2.5	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0
報道:柔道	0	0	0	0	0	2	0	0	0	9.5	13	0	2	4.5	0	4.5	0	22	0	0	29	6	11	18
報道:他スポーツ	3.5	0	0	0	0	0	0	3.5	0	0	0	1	5.5	0	0	3	5.5	0	0	5	2	31	4	0
教養:科学、社会	21	28	9.5	16	27	24	31	24	21	23	24	18	18	5	10	0	13	6	7	15	5	10	2	10
教養:文芸、歴史	8.5	13	19	17	16	21	19	26	23	19	28	18	35	33	10	20	15	4	17	19	10	19	26	19
彙報	28	19	19	27	13	15	27	13	10	6	6	12	6	12	19	20	12	8	7.5	15	9	8.5	10	17
娯楽:写真	5	6	6	6	6	4	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
娯楽:柔道・スポーツ	0	0	0	0	8	2.5	1.5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4	2	2	0	2	2
娯楽:その他	0	0	0	5.5	0	4	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	4	4	4	4
雑録:柔道	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.5	0	0	0	8.5	13	16	13	10	0	8	27	9.5	16	9
雑録:その他	0	0	0	0	0	0	0	0	10	3.5	2	5	1	6	1	1	2	2	2.5	0.5	0	3	0	3.5
総記事ページ数	104	96	98	96	91	98	105	101	104	90	96	89	95	87	82	103	103	100	105	106	116	116	113	110

表 8　月間記事ページ数サブカテゴリ別(1)

発行年数	大正6												大正7											
発行月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
啓蒙:嘉納	7	7	9	7	7	5	6.5	7	7	6	9	2	6	8	10	8	7	12	6	5	4	2	0	4
啓蒙:一般	16	3.5	6.5	0	16	10	3	17	0	14	0	7	0	0	2	6	0	4	0	0	0	0	3	0
啓蒙:柔道	17	4	1	0	3	0	2.5	1.5	6.5	6.5	2	6	16	4	21	22	16	13	7	1	1.5	5	6	12
実践:柔道	9	6	12	13	4	0	5.5	4.5	13	9.5	3.5	12	20	11	7.5	11	12	11	9	11	11	11	11	15
実践:他身体運動	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
報道:柔道	9.5	0	2	4	10	10	16	4	4	0	0	13	0	5.5	0	0	0	2	9	0	0	0	4.5	1.5
報道:他スポーツ	19	2	0	11	21	83	0.5	8	0	0	2.5	0	5.5	5	0.5	0	0	0	2	0	6	0	0	0
教養:科学、社会	9	43	56	51	36	11	56	25	27	49	47	31	11	9	0	0	5	3	5	7	0	4	7	6.5
教養:文芸、歴史	17	29	14	39	33	5	31	38	38	29	36	18	16	0	1	5.5	12	10	17	10	15	13	20	9
彙報	19	24	15	20	10	14	12	9	12	6	26	29	35	16	26	12	21	23	32	24	26	40	20	30
娯楽:写真	5	0	2	4	4	4	4	4	4	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2
娯楽:柔道・スポーツ	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5.5	0	0	0
娯楽:その他	9	0	8	0	2	0	1	18	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
雑録:柔道	16	5.5	2	0	4.5	3	0	0	17	6	0	0	16	12	0	0	2.5	0	6.5	13	4	1	2	0
雑録:その他	15	19	25	0	1	0	5	3.5	9	6	2	0	0	0.5	3	11	0	6	2	6	5	1.5	1	0
総記事ページ数	165	142	152	150	151	145	142	138	138	133	129	121	127	75	73	76	77	85	97	78	79	79	76	80

表 9　月間記事ページ数サブカテゴリ別(2)

⑥　水谷竹紫年表

西暦	元号	年齢	出来事
1882	明治 15		長崎市に生る。父は岡山県士族水谷六郎、当時三菱造船所々長。
1887	明治 20-28	6-14 歳	東京市小石川区磯川小学校に入学、一年終了後、長崎勝山小学校を経て、市立長崎高等小学校を卒業。
1895	明治 28-33	14-19 歳	岡山尋常中学に入学三学年終了後、長崎県立大村中学を経て、長島（誤字ママ）県立長崎中学を卒業。
1896	明治 34-39	20-25 歳	「中学上級の頃は海軍士官たらんとし兵学校入学の望み強かりしも、中学卒業近くより文学に親しみ早稲田大学文学科に入学す。専攻は哲学であつたが、演劇に対する嗜好深くその研究を怠らず、既に後年の萌し深きを見る。更に、スポーツに対しても尋常ならざる精彩を発揮し、庭球、野球、相撲、柔道、ボート、登山、その何れにもマネージャー的組織指導の才能を縦横に揮うと共に自らも選手として活躍した。早大庭球部は実に君の創設するところであって、今日、「三田」「稲門」の名によって併称されるその「稲門」の名称も君の最初に命名をしたものである。かかる運動万般の体験と理論の把握とは、後年、演劇文学の畑に縦横の策を揮いしと共に、運動評論家として一家をなせし因由であった。柔道は二段の段位を有す[53]」
1906	明治 39	25 歳	姫路練隊に一年志願兵として入隊。
1907	明治 40	26 歳	勢舞子夫人と結婚、早稲田南町に新生活を営む。夫人の令妹八重子も共にその新家庭の人となる。
1908	明治 41	27 歳	「四月「運動世界」を発刊す。蓋し、この種専門の雑誌としては、その発刊の早きこと内容の整備、日本最初のものと誇称して差支えないものである[54]。」

[53] 水谷編, 1941：p.240
[54] 水谷編, 1941：p.241

1909	明治 42	28 歳	12 月歩兵少尉に任ぜらる。
1910	明治 43	29 歳	「やまと新聞に入社し、今日の学芸部の仕事を受持つ、当時社僚或は先輩に岡本綺堂、柳川春葉、近藤紫雲、藤田勇、生方敏郎の諸氏あり。綺堂氏の「修禅寺物語」の初演（明治座）に際し、その劇評を執筆、生彩横溢の新劇評として瞠目さる。長編小説「熱灰」を同紙に連載したのもこの頃である。この年正八位に叙せらる[55]」 「[横井註：八重子の]父豊蔵病死し、母とともに竹紫のもとに寄寓[56]」
1913	大正 2	32 歳	島村抱月氏の芸術座創立に参画し、理事として活躍、経営方面にも特異の才能を発揮する。この年７月１２日歩兵中尉に任ぜらる。
1916	大正 5	36 歳	[横井註：雑誌『柔道』大正 5 年 4 月号よりその編集に当る。]
1919	大正 8	39 歳	「東京毎日新聞社」に入りて編集局長となり社会部長を兼ねる。大正 11 年文部省社会教育調査委員を嘱託せらる。
1924	大正 13	44 歳	芸術座結成牛込会館に第一回公演。爾来芸術座のプロデュサーとして、企画より経営又演出に当る。
1925	大正 14	45 歳	浅草松竹座で松井須磨子追善興行。大阪朝日新聞の委嘱にて演劇映画視察のため、竹紫夫妻八重子の三人アメリカの各地を巡行する。
1927	昭和 2	47 歳	東京歌舞伎座にて芸術座再興公演をなしその結成の理想を闡明にする「復活、舞台に立つ妻、映画九官鳥」
			昭和 2 年 12 月及昭和 3 年 3 月浅草公園劇場に早稲田演劇博物館寄附興行を行う。この頃より芸術座は名実共に挙る。

[55] 水谷編, 1941：pp.241-242
[56] 水谷, 1997

1928	昭和 3	48 歳	8 月満鮮巡演後、骨膜炎の診断にて神戸摂津病院にて遂に左腕を切断す。爾来隻手「片腕に影法師なき夜寒かな」の感懐を洩らしつつも、芸術座はもとより日本演劇の発展向上のために尽さざるなし。
			この年秋芸術座は松竹興行会社と提携、新派一座と合同し東京にては本郷座市村座を始め東劇明治座及び帝劇、後ちに歌舞伎座等の所属劇場に出演。
1929	昭和 4	49 歳	4 月宝塚中劇場に初出演。日本最初のトーキー大尉の娘を撮る。
1931	昭和 6	51 歳	麹町区紀尾井町三に移る。昭和 7 年「劇組阿国会」の組織に当る。又雑誌「演劇」を発行する。
1934	昭和 9	53 歳	3 月東京宝塚劇場に初出演、芸術座創立十周年記念講演あり
1935	昭和 10	54 歳	6 月歌舞伎座に於ける葉桜の演出を終りとして、9 月 14 日遂に病のためにその多彩の生涯を終る。行年 54 歳。

表 10　水谷竹紫年表（『水谷八重子 女優一代』p.288 に引用追記）